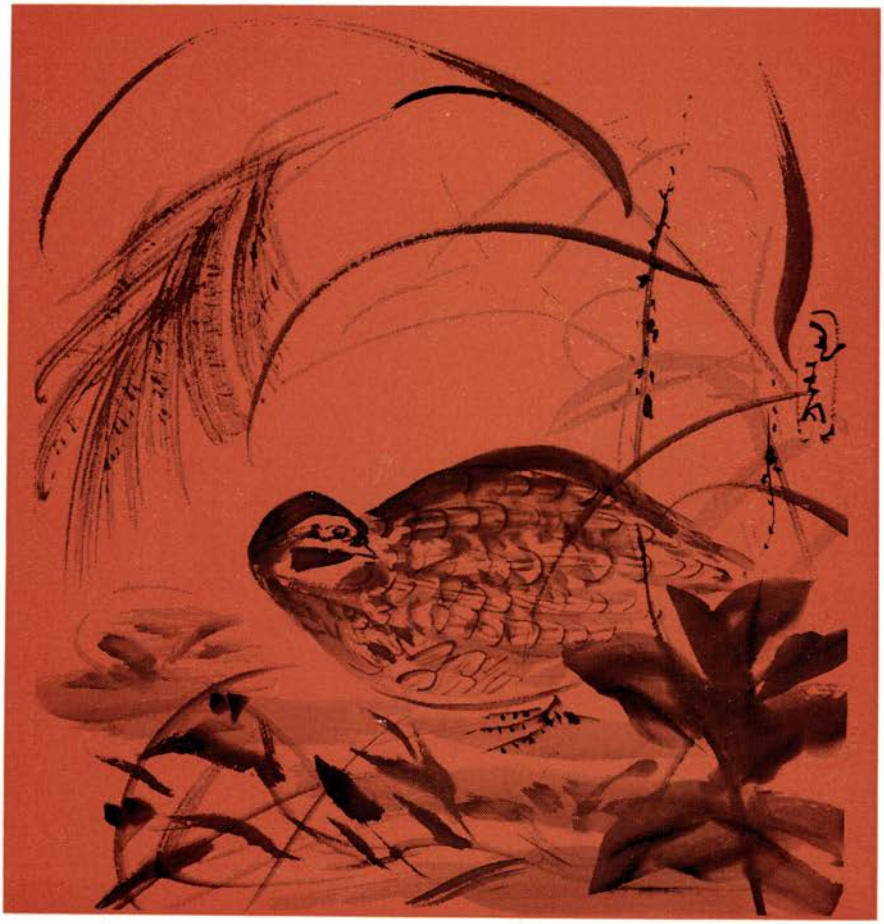
川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十年九月二十五日 印刷
昭和五十年十月一日発行 （毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻五八一号



日川協加盟

50年度二賞発表

No. 581

十月号

えらばれ
みがきぬかれた 灘の酒
超特撰 日本盛

超特撰
（化粧ケース入）
一、八リットル詰・一、八〇〇円

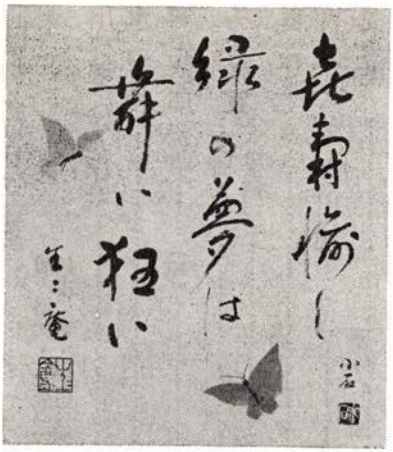
清酒
日本盛
ニホンサカリ
灘 西宮酒造 醸

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ！

豚饅
焼売
焼餃子
豚まんの王様、やき豚入り
叉焼饅

大阪・なんば
蓬莱
TEL(641)0551～2
551

〈出張店〉なんば高島屋／虹のまち鹿鳴／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
京阪デパート／堂島地下センター／中之島サン・ストアー／なんば新川店／奈良近鉄百貨店



叩こうとすればハエの目に秋がある

ああ言えばこう言う不遜はねかえり

黴くさい男のセリフうますぎる

美人です見れば見る程不潔感

ばあさまも古稀かと喜寿が驚いた

中島生々庵

おかしな話

今年の夏はあつかった。銷夏法という程でなくとも、ねむたい目をこすりこすり、薄暗い朝浜寺公園の遊歩道を一時間。汗びっしょりかいたままのシャワーの爽快さ。それから一日の職場が待っている。夕方は疲れて終って午睡30分間。これが午後のリクレーション。こんな夏ははじめてだと愚痴ごとを言うが夏のつらいことは毎年のことだろう。コチラ様の老化が年々加わっているのに気がつかぬらし。それでも台風6号あたりから、めっきり凌ぎ易くなって来て、庭の樹蔭にすだく虫の声もなんとなく秋の近いのを知らせるようだ。晩酌も冷えたビールよりも、日本酒を注文したくなる。これで今年の夏も終りかという気配が濃くなって、盃をふくみながら夕空を眺めていると「伊勢物語」をふと思い出す。暮れがたき夏の日ぐらしながむればそのこととなくものぞ悲しき

俺もまだ棄てたものではないぞ。と別の老人性センチになるから、おかしな話である。

座右の句　末っ子入学

あまえたの背にもいよいよランドセル（没食子）

私の句

三遷四遷孟母を真似て子を育て

北川春巣

川柳塔十月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

おかしな話……中島生々庵…（1）
柳俳雑感……尼　緑之助…（2）
誹風柳多留廿五篇研究……（七）……（26）
清博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原　亮
鈴木黄・室山三柳・入江勇・岡田甫
川柳塔（同人作品）……西尾　栞選…（4）
水煙抄……菊沢小松園選…（34）
麻生路郎物語……（10）……東野大八…（23）
秀句鑑賞……（同人吟）……若本多久志…（33）
……（水煙抄）……小濱牧人…（41）
近作……諸家…（27）
百人一首と川柳…（16）……冨士野鞍馬…（42）
愛染帖……橘高薫風選…（44）

柳俳雑感

尼　緑之助

川柳と俳句の相違はどこか、とはよく訊かれることだが、さて答えるとなると満足な言葉が出て来ない。一と口には言えないからである。進化の原則に応じたように誕生した柳俳が双生児であったことも、区別を混乱させる。

俳諧を母胎とした川柳が多分にその血を継承し、人間的に、そして文芸的を指向した。

生活にせよ、芸術にせよ、その時代の所産であって、初代川柳の動きも例外ではない。

当初から革新を宣言し、独立の旗を高く掲げて展開したものではあるまい。前句附の波の中で巧みな竿さばきを見せた、それは時流を広く見据えた初代川柳の人間であった。

片や芭蕉である。当時のインテリで、現代の大学教授的要素を持ち、俳諧革新へ立ち向かった、その方向を力強く進んだが、どうしようもない時代の壁は、ニヒル、隠遁的に足

50年度路郎賞・川柳塔賞発表……（28）

中島生々庵・正本水客・若本多久志・西尾　栞
川村好郎・菊沢小松園・戸田古方・大坂形水・橋高薫風

路郎賞・まるで夢のよう……林　瑞枝……（30）
川柳塔賞・夢のような……安藤寿美子……（32）
一分間の柳論……若本多久志……（30）
課題吟について……市場没食子……（32）
悼む／田中万作君……阪上十止庵……（46）
初歩教室……野村太茂津……（47）
大萬川柳「な　ぞ」……本田恵二朗……（50）
柳界展望……川村好郎選……（52）
本社九月句会……（54）
各地柳壇（佳句地10選）……庸佑・整理……（50）
一路集「里親」……児島与呂志……（59）
「新刊」……藤田軒太楼選……（48）
「利息」……辻白渓子選……（48）
編集後記……木山遠二選……（49）
……（一三夫・葉子）……（65）

座右の句

凡聖一如元旦の心しる　（路　郎）

私の句

さびしさはちょこ一ぱいのわれとなり　吉田水車

を向かせた。それはそれなりに衆を集め、日本人の宿命的な、形式超然趣味に合致して拡大された。

両者とも、各々一派を成したのだからたいしたものには間違いないが、勿論一人で成し遂げたわけではない。

さて、川柳は折角革命を成就しながら初代川柳の後は、いわゆる狂句百年の悔いとも呼ばれる頽廃期に踏み込み、その後遺症は未だに傷根がある。俳句に大きく道を開けられた（量的）原因の最たるものである。

明治の中期、剱花坊、久良伎等によって再興運動が展開され、大正、昭和初期にかけて路郎、三太郎、水府等による現代川柳の基盤が出来たことは蛇足、このように川柳の流れを追想すると、故路郎先生の一生をかけた苦斗の偉大さが今更のように蘇って来る。

かって柳俳無差別論があって、私も拍手したことがあるが、これは俳句への追従のまぎれがあるのでやめた。ともあれ、この同根短詩は今後も長くもつれあいながら覇を争うことであろう。

もう百年もすると「センリュー」の花が世界中に見られるに至る、と思っている。

それは、もっとも簡にして要を得た人間の詩であるから。

川柳塔

西尾栞選

大阪市　江城修史

身構える暮しへ稼ぐ詩があり
雑踏に裏切りの脊を視野に置く
友情へ振る媚ならば捨て給え
派手なシャツ着ても若さは過去のもの
年の差の意識で包む夫婦愛
隙のない男へ言葉を飾り合う

倉敷市　野田素身郎

おざなりの視察時計ばかりみる
更年期今日はちがったとこ痛む
いつの間にか社長ペースとなる対話
流行はおそろし炎天下のマキシ
肌だけはシングル級の色に焼け
左遷の地ここには蜻蛉も蟬もいる

島根県　堀江芳子

暑いなど不動明王申されず
身に覚え叱れず肩を抱いてやり
梅干せば母の匂いがつんとくる
円満法は妻の手品かもしれず
つまずいた石が教えてくれたこと
各駅停車して人生の良さも知り

大阪市　吉田圭井堂

説く方が間違ってるか無いモラル
計算から外ずされていた扶養義務
人の運　潮に満干のある如く
移りゆく世相へ明治うろちょろし
三日目でああ極楽が嫌になり
養殖に松茸だけはまだ墜ちず

八尾市　香川酔々

葛城の寝釈迦冷房などいらぬ
日本の過去Z旗を揚げた日よ
ルージュ濃くひいてシナリオ考える
死者こそは陽気過去帳ただ厚し
すじ書きの通りにならぬ四面楚歌
千手観世の一手が枕母眠る

神戸市　小浜牧人

征きて還らぬ八月の雲灼ける
番犬を飼って他人を信じない
調べてるうちにだんだん腹が立ち
ちょぼちょぼの出世でつづく君と僕
思慕遙か　ひたひた潮が満ちてくる
野球記事から朝めしがまずくなり

倉吉市　奥谷弘朗

菊作り妻はモンペで身構える
定年が引込み思案にしてしまい
一徹の割にはもろいとこがあり
そっくりに似てきて母を悲しませ
見て歩くだけの夜店で足りる妻
鈍才の根気で歩いた二十年

京都市　松川杜的

演技など存ぜぬ父のそれでよし
六段の調べが好きでまだ嫁かず
八月の詩情朝顔との会話
紙吹雪うけて会心のインタビュー
お隣りの電話で日曜眼を醒まし
地図にない国へ行きたいと思う日も

竹原市　森井菁居

カープ勝ちそうでビールを冷やしとく
酒飲みに墓参を兼ねて子が戻る
中年の不安かきたて友が逝く
厄年の奢り　素直に受けてあげ
企業エゴ所詮は他所者だとおもう
民宿の子に里ごころつけられる

青森市　工藤甲吉

赤ちょうちんの下に集うは弱者なる
一生を尺取虫の伸び縮み
わが影に亡妻を重ねて月と行く
一筋の煙が人の姿なり
だまされたくやしさ金の額でなし
自分だけ食うウナ重に気がとがめ

大阪市　宮尾あいき

金魚飼い鈴虫鳴かせて年令(とし)かいな
うちの鈴虫ひいき目で見て鐘二つ
金持の真似する息子のセドリック
孝行の押売り車へ無理に乗せ
赤とんぼおまえも故里すてたのか
純生の空気がうまい山の宿

（金剛山）

大阪市　山川阿茶

自己顕示眉を剃ったりアイシャドー
アベックの男の方が指環さし
喜寿すぎて先生で通るつとめ口
親友の愚痴きく宵の遠花火
死ぬだけが残った仕事気楽なり
仮縫いへゼラシーもある賞め言葉

鳥取市　河村日満

窓辺もうビール並べて待つ発車

父の声がぴりっと効いて朝を起つ
石一つ探りおおせた舌の先
石蹴れば憂さが晴れるとでもいうや
標的へガウスの方程式正し
児は母を恋うミルクで育っても

大阪市　大坂形水

禿鷹の餌食になった倒産社
映画館に入り　来るとこ違えたよう
連れがなくマニエル夫人見ずじまい
さしさわりある名を避けたぬるま筆
その時の人　一人減り二人減り
誘われも誘いもせずに遠ざかる

西宮市　若林草右

骨握るような握手で病室を出る　竹荘氏を悼む（二句）
盆供養　また新しい仏の名
朝顔を並べて玄関狭う出る
神様のミスは蚊にない血液型
世も末か抜け穴隠れ穴落し穴

大阪市　不二田一三夫

性の専属契約　結婚すると決め
先生といわれ新聞とらされる
外人に飼われた土佐犬　英語知る
きのうの不快指数　やっぱりこんな記事
20時間飲まず食わず寝る　校了

倉敷市　水粉千翁

ほつれ毛のことさらまろき肩に触れ
片隅に露草という色で咲き
うちわ持つ憂いおんなの香が流れ
鉢巻をしたが根性にはならず
儀礼的風と扇子も知っている

大阪市　金井文秋

突っ走るサイクリングに風の詩
あこや貝不本意な玉抱かせられ
不機嫌な顔ジンクスに触れたらし
イソップもグリムも嫌い漫画読む
国立へ夢を育てる塾通い

宝塚市　傍島静馬

若者に老人席の字が読めぬ
零落はしてもマナーは心得る
ご愛顧に報いバーゲンでも稼ぐ
ピカピカに研いで切れ味悪くなり
変る世に変らぬ悲願の百度石

岸和田市　高橋操子

それぞれの生き方汗は光るもの
世のうごき親もカラーをぬぎはじめ
消沈する意気へ他人のむち嬉し
おだてにも乗ってあげます面白さ
踊り場の倖せ月が見守りぬ

高槻市　若柳潮花

七色の雨が流れるバーの窓

あまえてもすねても車呼べと言う
食えずとも男沽券を捨てきれず
虫籠の哀れ真昼の陽があたり
中元のことで名取りは顔をよせ

尼崎市　黒川紫香

缶詰でビール男と男飲む
リュックみな降りて高原列車行く
来て見れば小諸城趾は蟬時雨
軽井沢若き女性と突き当り
千曲川詩情も見せずダムがあり

大阪市　市場没食子

古希過ぎて宿替えすると思わざり　長男と住所交代（一句）
日本の夏もハワイ化してアロハ
やっとこさ嘘を言わんで事がすみ
パパ似だのママ似だのとて宮詣り　（六人目の孫生る）
君葬る顔々梅雨も今日は晴れ　（竹荘君逝く）

竹原市　三宅不朽

走馬灯長女テレビを消してくれ
砂丘有情後姿をたれも持ち
愛恋の断つなら竹取り物語
人形の笑ったままで蓋をされ
七色のライトは知らず殺陣師老ゆ

松江市　小林孤呂二

甲子園に風あり一喜一憂す
水蓮の花に似た女臨時なり
ミスオールドさすが免許の数を持ち
芳名録人の相場もきいてみる
参加する意義へ課長も狩りだされ

大阪市　川口弘生

拾ろわれて小猫おしぼりのように寝る
捨て猫の名もなきままに居住権
石一つ拾ろて帰りぬ山は霧
人へ投げる石で自分も傷ついて
子育てが済んで他人の子をあやし

和歌山市　野村太茂津

真実へ無口な資産あり過ぎる
マヨネーズ独りよがりの味も賞め
本筋は野菜マヨネーズ変ろうと
抵抗があるから執念押しつける
資産家の財に呆けてる不倖せ

米子市　八木千代

代案のないまま印を重く持つ
心だけは残しといてね更年期
嫁姑この一縁をあたためる
娘と同じ愛にためらいなく叱り
空廻りいつかリズムに乗ってくる

八尾市　高杉鬼遊

泣き虫の子に木登りの姉がいる
すまないと思い妻もそう思い
日の丸とはっきりわかる風が吹き

教会のローソクだから揺れはせぬ
裏町の主役は空のドラム缶

桜井市　岩本雀踊子

無駄使い多いと思う市民税
ハンカチの白さも武器とする女
合鍵を持たさぬ妻にまるめられ
勲章をもらう嘘の顔がある
三百六十五日いつかは過去となる月日

大阪市　小出智子

夏休み学校の門いと涼し
砂糖壺の中で呆けているわたし
食欲がないとは云うたことがなし
遠い噂の中で女は滅びゆく
猫でさえわたしに知らん顔をする

豊中市　戸田古方

雲は不思議雲が動くのも不思議
兄さんがまた直されている敬語
クーラーがないから涼風嬉しうて
政治家の口は異常に見えねども
山陰の素顔てこんなとこかいな

竹原市　山内静水

猛犬も昼寝している蟬しぐれ
彼とした約束ちちはは悲しませ
大恋愛で結ばれた嫁の向う意気
相談は内にはなかった祝ごと
六十の再起手術の肚を決め

兵庫県　遠山可住

顕微鏡の隅でおそろしき生理
台風も来かけすず虫ひげが延び
ちょっと差が出来て隣りが敵になり
管理職手当で忠誠誓わされ
中年の武装はすぐにこわれそう

八尾市　宮西弥生

割り勘が女三人へ割り切れず
このままで石になりたい日のしあわせ
モナリザの過去が知りたい日の微笑
溺れてはならない傷心を抱いている
八月の絵筆へ女ひとり来る

今治市　越智一水

打水のそこから　三味の音がきこえ
鮎釣の嶺々　霧がまだのこり
左手も添えて握手をするフォード
御見舞へうわさ話を教えられ
出世せぬ男　約束よく守り

竹原市　小島蘭幸

夏バテへいい試合する甲子園
あれもこれも独身のうちに買うておく
お見舞に行けば嫁さん早よもらえ
謎のままにしといたほうが良いと知る
空白の一年がある人気歌手

鳥取市　両川洋々

花道の無いまま駄馬として歩み
フンフンと笑って済ませる嘘を聞き
明日は明日の夢を追えよと夕陽墜つ
風紋を繕う風がピタリ止み
風が出て砂丘生命をふき返えし

岡山県　池田古心

捨てられた山道萩の花が燃え
小さい嘘親つきそれから子が習い
お喋りへ封じる様に咳が出て
無理に箸取らせ老妻気病みする
病名のリレー月日に痩せ疲れ

岸和田市　植山武助

知っているだけに苦しい嘘になり
一服がうまい幕間の由良の介
公害へ太陽はもうあきらめる

娘の結婚（二句）

嫁がせた淋しさ息子の嫁が埋め
娘を奪った婿殿なれどうまが合い

兵庫県　大江秋月

孫等みな帰って妻が二日寝る
外孫が風呂場に金魚置いて去に
ヘルメットかむれば暴走族に見え
六十の手習いという計算機
コマーシャル孫が一番よく覚え

京都市　都倉求芽

夕風の涼しさ如露の水がとぶ
カーブカーブ景色の表裏をローカル線
駅前のうどん屋乗る汽車聞いてくれ
ヘルメットかぶってもポスターは美人
ライト浴びて噴水が背伸びする

松江市　恒松町紅

子守唄音痴それでも孫寝つき
ひよっこりと駅で出会ったのも奇蹟
ゴキブリの悪役らしい断末魔
留守宅でオハヨウなあんだ九官鳥
過ぎ去れば竹槍火叩き皆狂気

八尾市　高橋夕花

曼珠沙華恋に生きよとゆうなかれ
大文字もえて無性に人恋し
秋扇恋には遠き風のいろ
煩悩を夜霧の中へおいてくる
夫と息子の話題の外でレース編む

尼崎市　高津徹也

日記帖ほほえむ母をペンにする
枯葉焚く淋しさ老母は見たらしい
風鈴へまた夏ありき秋ありき
たばこ盆未練がそっと灰になり
マニキュアは渇く涙と仲がいい

堺市　河股緑水

過去に触れぬ女あるじにたつ噂
感情を押えておんな畳拭く
終戦に哭いた炎天今もある
酒たばこ止めて生きたい世でもなし
よっぴいて眠らぬ自動販売機

堺市　藤井一二三

低血圧聴診器まで秋を待ち
姉婿の不覚は義妹綺麗過ぎ
困ったことにすぐ人さまが好きになり
まだ若いネクタイへ席譲られる
口ごたえ児の成長を妻と賞め

平田市　久家代仕男

宿命かおんなは無駄なものを着る
人間も茄子も疲れた照り続き
これしきの寝冷えを妻にいたわられ
ほほえんでばかり入歯を忘れた日
飼葉刈る堤へ残す月見草

枚方市　宮川珠笑

金で済むことで兄弟縁を切り
皿みんなからで我が家の夕餉すむ
妻も子も留守でゴキブリ濶歩する
人を待つベンチ入道雲踊る
雷迫る高圧線の無表情

島根県　小砂白汀

乳房のとんがり見せびらかすを夏という
鬼豆をからから笑う鬼がいる
行き先も知らずに枯葉風に酔い
小きざみの動きピンチを切り抜ける
腹が出てひらりと溝を越えさせず

新宮市　大矢十郎

廻れ右しようアメリカばかり見ず
三十年抱く切札の字がうすれ
商品となった女の足の爪
土拾う姿は明日の我がチーム
気象庁に又おどされた釘を抜く

三重県　川上大輪

どの雲も母に似て来る施設の子
泣いた児の瞳の奥に虹がある
風鈴の音が乾いて秋となる
玄武洞陛下もここで立ち給い　（山陰の旅）
五百羅漢みんな喋ればすごかろう

柏原市　大峠可動

捨石になれず絶叫型となる
いつか皆死ぬ貝殻節を習おうか
妥協する涙を溜めて父が舞う
夕焼けをうたう終着駅に降り
直線を引けば人間らしくなる

笠岡市　松本忠三

寝たきりの父へ自然の風を入れ
一本のビール女房の助け借り

水平線入道雲に支配され
学校のプールで夏が物足らず
扇風機の下で鈍行に揺られ

大阪市　天正千梢

交っては居るが朱には染まらない
たしかな杖へ白装束ついて行く　（御嶽参拝登山）
足のもつれを這松に笑われて
がたがたぶるい三千米の御来迎
山は呼ぶも一度登れと山は呼ぶ

松原市　玉置重人

見積書約手と聞いた慌てよう
その肚をさぐるキャッシュとブローカー
無理言うてくれヤンチャしてくれ孫が病み
さざ波に黙殺された石の悔い
波静かテトラポッドと語ろうか

広島市　林野甦光

エレクトーン腹にこたえて嬉しい日
山小屋で塩昆布の味披露する
釣れるまで動かぬつもり海の私語
おみくじは吉でも命保証せず
頂上の出逢いは悲劇かも知れず

東大阪市　落合思月

はからずも我が家の敷居高くなり
権力を取れば凡人以下の人
赤旗をふったこともある貞女
懸命に育てた娘嫁ったきり
愚痴云わぬ妻で中々妥協せず

大阪市　本多柳志

風鈴の今日立秋の音で鳴り
この女の掌の冷めたさを握らされ
許す気の夜になるのが怖くなり
玄関に靴が揃うている平和
末席の意見に会議踊らされ

大阪市　西出一栄

七夕へこより縒る役言いつかり
ほととぎす一声待つ間蚊に食われ
一陣の風に呼吸を整える
積乱雲でっかい希望を持てと言う
順番が来そう又クラスメートの訃

倉敷市　稲田豊作

抜け殻でいいさ分身皆元気
客用の言葉を妻はよどみなく
自己嫌悪いよいよつのる法話の座
放言の刹那良識眠ってた
古傷を抱いて真珠のあこや貝

大阪市　神田秀峰

クソ暑い時の背広は阿呆に見え
失敗をしてから諺思い出し
聞き直す返事へ答え変えてみる
腹の立つ吐け口蛇口を全開し

ダンプにもあった子鳩のマスコット　和歌山市　小川佐知子

かたくなに意地を通した日の憂い
パンタロンのくせがとれない立てた膝
いつからかあなたの歩巾となる歩み
忘れたい青春のある一ページ
ふれ合いし心を家にもち帰る　和歌山市　若宮武雄

本流と云われゆったりとして深し
今も尚　子等を案じてやれる幸
つまずいた石に責など無いものを
ふる里を青一色に描く祈り
友情がそれから先を言わせない　氷見市　関美子

秋少女　胸には育つ人のあり
振りかざす旗なくしっぽもよう振らず
厄年へ刺客の唄がきこえそう
夫唱婦随　泥の舟でも乗ってみる
句を吐いて吐いてなお繭仕上らず　泉大津市　村上春巳

蟬やっと皮を脱いだを捕えられ
夏祭り下駄と言うのに踏まれて来
安全帽予科練だった挙手があり
流行語子供の智恵がいるのなり
氷屋の鋸のリズムを見て通り　守口市　羽原静歩

帝釈峡賽の河原は冷々と
中年の冷汗ばかり階段を踏む
反論もなく宇治金がとけて行く
三姉妹御縁は逆な風が吹き
百生きて女百まで化粧する　守口市　野呂右近

潜在の意識呼び出すアルコール
尻に火をつけて蛍は楽しそう
水着ショーお臍曲りは見当らず
ゴキブリを叩いて犯罪感は無し
時期過ぎて狂い咲きする花に似て　姫路市　梅谿庵不酔

二三枚勘定が合わぬ二日酔
お流れをなどと会費はこっち持ち
冗談で言えるもんかと口説いてる
高野山で修業したがまだ暑い
黙秘権刑事の煙草で崩れ出し　名古屋市　吉田水車

二、三人タクシー下りるにぎやかさ
時限爆弾時計ばかりがコチコチと
病人の心細いは夜のとばり
チェッチェッと舌打ちして雀逃げ
七十の手習い嗤う蟬時雨　八尾市　大路美幸

ふるさとの甘さへ並ぶ蟻の列
喰いちがう立場を知らぬ常識論
考えのない一言は償えぬ
とことんの結論　祈るほかはなし
瞳を伏せて聞く毒舌はオルゴール

大阪市　津守柳信

バカンスの欲しい女の七変化
四十路の理性へ邪推焚きつける
使いわけ出来た笑顔へ立ちすくむ
めんそうれに釣られる人にある根気
満員のビヤガーデンは雨模様

大阪市　有信新之助

つわりからうどんが好きで来た児連れ
だしの秘訣訊いて世帯の足しにする
云う通り別嬪やけど他人の物
歩き方が悪くてアベック吠えられる
過去を捨てて捨てて何かが欲しい

鳥取県　清水一保

不況など若さで吹っ飛ぶ海と山
太陽と取組む若さよ肌の色
飲み過ぎの薬飲み過ぐ馬鹿らしさ
地球では出来ぬ握手を宇宙でし
身構えて待てば夕立外れて降り

大阪市　柳原静香

難聴の妻の分まで礼を聞き　（財布を拾って）
生んでやって誕生祝いせびられる
ドラマでも妻はやっぱり損な役
隠棲をしたいような島がある
旅の宿海から昇らぬ陽を惜しみ

富田林市　板尾岳人

歩いても歩いても靴十文半
明日歩るく峰に作戦などいらぬ
どしゃ降りへ山の男は慌わてない
噴火せぬ峰を叱って三〇〇回　（金剛山登拝三百回）
三〇〇の峰に立つとき晴れていた

島根県　堀江正朗

老いてなおいちばん美味い朝の飯
嘲った蠅の奴には眼があった
闇濃し妻といさかいした夜は
手さぐりへ茶碗転げる派手な音

藤井寺市　西いわを

歯医者へは髭そってから行く礼儀
菊造り土の匂いを嗅ぐ日なり
夕立の風は虹ごと押寄せる
風鈴の鳴る風向きへ吊し替え

富田林市　岩田美代

執拗なほど振り返るよい夢で
感情を殺しそこねた目と出合う
たとえばのモデルにされた仮面なり
素晴らしい錯覚だからそっとする

伊丹市　小川静観堂

太陽の絵ばかり画いて孫達者
初恋の娘生きてたら傘寿かも
米寿を祝われかえりみすればただそれだけ
米寿の祝い老妻かたわらに侍してこそ

藤井寺市　児島与呂志

嘘の無い夕日の天に腰のばす
イエスノーはっきり云えぬ苦労人
生意気と云われ甲斐性もんとも云われ
母性愛胎児笑っている動き

岡山県　嘉数千代香

色目鏡はずせば小さくなるわたし
悪夢だったと気付く日さんまの香にむせて
不吉なる予感扉を開かねば
ほんとうの素顔掴んだ盗み聞き

松江市　柳楽鶴丸

雲の下又も重ねた罪一つ
心の中に石を投げこんだ女
以下同文これが僕の人生か
男心知らず良妻ぶっている

松江市　吉岡遙児

半額セールで買う来年の品
開けゴマ日本は足らぬものばかり
六価クロムお次は何の公害禍
オードブル断り切れぬままに酔い

神戸市　中村ゆきを

雨宿りふと表札の女文字
寝返りの夢の続きか笑ろうてる
ステテコで上れ上れと飲むつもり
夏雲に語りつぐべし戦没記

大阪市　神谷凡九郎

人間を喪い寿命が伸びちゃった
そうですねん私等泳いでいた此処ら
ゾッとするよな拍手に囲まれてるまどい
やっぱり生きていたい嫌な嫌な世相と云いながら

東大阪市　斎藤三十四

冷房車が来た吊帯でもよし
遮断器降りる今乗って来た電車
甲虫孫の日記で育てられ
秀才の息子で故郷に遠く居る

堺市　高橋千万子

秀才がわが子を錯覚して育て
親類に秀才が居て邪魔になり
悲しみにだれが決めたか黒い色
値は張るが女の笑顔を思う時

美祢市　安平次弘道

二、三年死ねぬスターのスケジュール
常識が常識でない世代の差
謎出してしばし優越感にひたり
金ためて人の言葉を信じない

竹原市　時広一路

追い風が止ってからの重い足
夕焼けの空しさのみを知る孤影
放浪の道に懸った虹の橋
風鈴も鳴らず瀬戸は夕焼ける

東大阪市　竹中肖二

旅はよし老妻も浴衣で座る膳
良く見れば胡粉飛ばした波頭
美しい女が写る夜の車窓
地下足袋の明日は明日コップ酒

松江市　岡崎祥月

子のために馬車馬となり馬鹿となる
原点にかえり算盤玉はじく
階段をトントン若い足の音
レントゲンかんじんなとこ秘めている

島根県　錦織文子

雲湧けり夏来にけりと言うが如
世の狂いガードマンにも手錠はめ
盆栽から見れば人間勝手すぎ
故里の訛りに和む旅帰り

神戸市　仲どんたく

はした金稼ぐ門出と靴は知る
媼は花　翁は絵筆の共白髪
鏡台の時間を欠伸で待たされる
しゃっくりが出た初孫の大事件

大東市　土岐トク子

原爆は許すまじ許すまじ回顧録
執念の旗ひるがえすヘルシンキ
この幸を分ちあげたいしまい風呂
亡母生きたように私も生きて居る

橿原市　岩井本蔭棒

泣き寝入りしてたら金になりまへん
開発へ蛇もどぐろを巻いとれず
ガム噛めば足が組みたくなる女
渇いてる男と女すれ違い

倉敷市　能登原白水

割り切れば守銭奴だった雲嗤う
ひたむきな虫に人生教えられ
併呑の海にあやかる海に佇つ
山田稲夕立雲に背伸びする

宇部市　平田実男

小の虫殺して新幹線走る
貸している金は十円でも覚え
栄転のつもりを淋みしい目で送り
消防署訓練だけがちと不満

島根県　榊原秀子

水平線までを素足で歩きたい
蚊帳の城もう悪魔など寄せつけず
暑い日のやっぱり熱いお茶が好き
旧盆へ一足さきに咲く桔梗

小松市　馬場魚山

炊事嫌い掃除嫌いが肥えてくる
満天の星の中にも消える星
内縁の妻が重荷となる不況
焼け跡に火元の方が早く建て

富田林市　和田維久子

以心伝心電話の顔がきれい過ぎ
再婚へうねりの高い波が寄せ
槿花一朝の夢と今日をあきらめる
わたしの影で見ていてくれる瞳に生きる

岡山県　出原敬一

瘢痕を職人見せる原爆忌
情報の確度をわらうお手伝い
つつましき和服が放つ調査員
島からの使者へ汽笛は朝を告げ

愛媛県　渡辺暁童

色も好みも　明治者也
ポロが出かけて　閑話休題
性の区別も　つかぬよそおい
すでに鋳型に　はまる還暦

和歌山市　吉野冨江

主導権まだ離されぬ寡婦の性
札束に歩く方向変えられる
さりげない私語は夫の下心
老僧の世辞タクシーまで呼んでくれ

倉吉市　小林由多香

結論はだまって聞いてた父が出し
相談にのっても金は出さぬ肚
父の顔知らず父の墓洗う
少年の思い出素足で砂丘ふむ

大田市　藤田軒太楼

安らかに永眠った母の居間に坐し
実をつけてこそ仕合せな花と知れ
智恵つけて首尾を待つ間の煙草の輪
世話甲斐のない奴またも職を変え

出雲市　原独仙

青田風いいご馳走と胸を開け
夏休みテレビ、クーラー占拠され
どん尻でも巨人は孫も俺も好き
緑陰の恋の絶頂へ毛虫這う

呉市　槇田英詩

日本に生れ風呂敷つきまとい
私は女主婦の座から主張
サングラスの女におとこ迷わされ
被爆三十年証人探しをする不運

仙台市　川村映輝

蛍飛んだだけでニュースとなる世相
孫誕生小判のような足が舞い
ずうずうしい女きょうも街に居た
一万円札でお釣のくる理髪

辛辣な野次は斜に飛んでくる
雑草に露あり蛍の身を焦し
旅の恥かきすてましたパスポート
二十台僕にもあった眼鏡拭く

倉敷市　小幡里風

太陽に溶けそう八月十五日正午
仏にはすまぬが通夜の生あくび
南無仏　娑婆不景気な御供物
御先祖は昔の若さで会いに来る

松江市　中川晃男

登り坂歩幅となった齢と知り
此の上に現世利益を神だのみ
渦巻いた汚染の中で金儲け
ここだけの話ですがに釣り込まれ

生駒市　草深酔升

秋立って日本に女取りもどし
清水の舞台飛ばなきゃついてけず
人妻というまがきよりかいま見る
ふところには入った小鳥指をかみ

鳥取県　鈴木村諷子

淋しさに耐える老母の髪をすく
ふるさとは湖底に沈むダムの碧
知恵の輪がとけぬ私を孫が好く
裸か銭集めて飯場のにごり酒

西宮市　藤村〆女

お揃いで出かける旅の宿ゆかた
CMに釣られ飛びつく好奇心
池埋める噂さも知らず鳴く蛙
鉄窓に親を案じる不孝者

大洲市　堀内暁風

即発の女　妬心を白くぬる
有難や言い値で盆の花売れる
行く先きの合間に球宴カーラジオ
さあどうぞためらわせない自動ドア

大阪市　藤田頂留子

若者の歩調へそっと道をあけ
冷奴このひとときの足るを知る
ひらひら　ひらひら　ポプラが秋を囁いた
穂すすきに行きも帰りもまねかれて

松山市　谷のぶお

立秋へずばり暦に嘘はない
落選の憂目こんなに苦いもの
犬死はせぬと小ちゃな名を残し
冷房に寝起きの人は青く見え

東大阪市　桑原喜風

子を人質のように学校からの寄附
墓地の価を聞けばうっかり死ねもせず
無作為だ素朴だなどと誉め言葉
寝たふりで聞けば母娘で俺を誉め

諫早市　原田明春

今治市　原田一風

着色をして老妻は良い機嫌
芒原風は肋骨吹き抜ける
歴史哀し富士の裾野の道祖神
歯が出来るまでは豆腐で酒を飲み

島根県　松本昌

不況きびし転身出来ぬ小商人
行きつ、戻りつ、人間弱い性を持ち
眉をそり女逆う化粧する
妻の事、子の事、日記欠かさない

倉敷市　藤井春日

負うた子の教えにまだまだ従えず
捨てられた恨みも懐かしいものとなり
悪人でもいい女の愛は赤く燃え
土地成金なにか肩書欲しそうな

大阪市　室谷徹舟

孫が来て妻が嬉しく疲れ果て
おしめりが熱雷という暴れよう
冷房の窓へ入道雲そびえ
気がつけば健康に感謝忘れてた

和歌山市　内芝としよ

金策に息を殺して待つ返事
秀才を育てた母が一人住む
黒髪をアップに喪服の似合う人
車窓から声をかけたい人が行く

唐津市　新岡回天子

寸借も云えない親へ黙って出
待って呉れと言ったが何の知慧もなし
夕涼み古老のはなし聞けずなり
運命が似てるかミクジ同じもの

高槻市　福田丁路

ゲリラにはならぬと吾が子信じきり
つつが無く古稀を迎えて背伸びする（50・6・27古稀を迎える）
天を突く鞍馬の杉を値踏みする（50・8・8京都鞍馬寺）
曇り後晴れて鞍馬の蟬時雨

大阪市　中川滋雀

ふる里の話題をつなぐ蟬しぐれ（お盆帰省）
新幹線今日は無事故の旅を終え
ひと滴身につまされたあとと知れ
話題また父の頑固を電話口

岸和田市　葛城伊三郎

育ち行く子にも遅速の不同あり
釘一つ打つにも夜は響くもの
金だけの世に逆ろうてほっとかれ
暴走の腰に抱きつく馬鹿もおり

岡山県　白岩文衛

捨て球を投げて波紋をたしかめる
新聞の論調憎みめざし焼く
新刊を開くときめきまだ失せず
恋してる十指がみんな美しい

高槻市　山田季贊

弱点を上手に突いて納得させ
結論は主役で話せるよい身分
無料パス貰うても乗れぬ年を老い
和服着る妻やっぱり若くなり

和歌山市　沢山福水

八の字の髭で先祖が分りかけ
倖せの窓太陽に覗かれる
情報は筒抜けだった敗戦記
明日知れぬ脆きいのちを憎み合い

兵庫県　河原みのる

ブレーキは掛けてほどよう呆けるコツ
此の齢で食養生をおかしがり
ひともとの稗も許さじ老農の
不可浸は破棄して覇権のことかまい

大阪市（京都・大原）　河井庸佑

風情ある雨の大原三千院
思い切り石を蹴るにも石がない
忍耐の教えかきょうの椅子となる
立場上言うてることと聞き分ける

和泉市　西岡洛酔

文明の利器人知の域を越え
不精髭伸びて働き峰帰る
取得ない男美髯を貯える
あらあらあら女の出逢い派手な声

岡山県　竹内翁童

日曜の雨自己嫌悪をさそい出し
お守りを山ほどもって事故にあい
老化現象が小言多くなり
レイオフの無聊口ひげをたくわえる

米子市　増田竹馬

海外旅行連れ小便と云う噂
ヌード屋と団体交渉するも旅
あでやかさ遊女に似たり水中花
盆栽よお前も背伸びしたかろう

玉野市　小谷仙山

花の色それぞれ自己を主張する
お膳立出来て相談持ちかける
古くさい言葉の味を噛みしめる
お手製の味誉めてる程に食べてない

鳥取県　林露杖

みちを説く人そのみちにある演技
民宿の漁港祭りに来合せる
帰省子が去んで自失の夜が更ける
ああ惰性哀れ暑に耐え職にたえ

鳥取市　大塚豊生

金脈も人脈も無く的を追う
譲られた席を母子へまた譲り
乗り越した町で名所を案内され
夕虹が生まれ娘の村へ伸び

大阪市　西川誓二

法善寺に明治が残る石畳
苗でよし、金の成る木が庭に欲し
我が土地に御座候と杭を打ち
席譲られて明治のボーイ老いを知り

和歌山市　津田与史

目的のある汗拭かずとも拭かずとも
ポンコツの五体繕ろっても繕ろっても
蜂が来る、蝶来る庭はただ四坪
雲海に立って汚染の街を見ず

大阪市　神夏磯道子

真直ぐな瞳に誘う隙がない
影法師所詮自分につきまとい
知らぬ間に作った壁の中にいる
籠の餌を拾う雀にある自由

大和郡山市　森田カズエ

永い目でみれば世の中いたちごっこ
一定の距離を保って行く夜道
一晩だけ泊めてと実家へ娘がかえり
ちょっとだけ吉保殿の肩をもち

岡山県　直原七面山

燃える女の息が切迫
飲んで帰えれば妻もメロメロ
私とあなたの愛の航跡
浮気を見破る妻の直感

大阪市　福井多蘭子

やめていた酒立秋からまた始め
会議会議結局倒産の果となる
ステテコの患者ニコニコ這入って来
浪曲にせめて人情残っとり

東京都　山根白星

騙まされた挙句男をいま騙まし
あぶな絵を駅のトイレに見た画才
トンボ眼鏡からは見えない形而上
貧富の差あり内角の和は同じ

柳井市　弘津柳慶

腕白だった僕が話題の同窓会
還暦の父の写真と今の僕
孫に電話したくて妻へ謎をかけ

東大阪市　竹中綾女

雷の嫌いな犬でそばに来る
留守番の退屈犬と対話する
孫の部屋所在の無さに掃除する

貝塚市　行天千代

秒読みでだんだん花嫁出来上る
眉ひけば女は急に妖婦めき
夢に見る亡夫は若く元気そう

神戸市　佐々木静泉

三DK一家の主です借家です
誕生日扶養家族でなくなる日　（長女高三）

一張りのテントで親娘の対話する

浜田久米雄

審議会委員会でと丸められ
しばらくで消える噂の中にいる
マイカーで金が車庫には土地が要り
ひとしきり騒いで渋い顔で去に
いま生きていた蠅がはやたたかれて

本田恵二朗

風鈴が奏でる夏のセレナーデ
二人三脚で青い鳥探してる
不機嫌な血圧ゴルフになだめられ
大切にいじめられてるかぶと虫
庭石の苔三代の貌でいる

正本水客

夕焼けのなかで保護色に女なる
見上げる石段に山門が立ちふさがる
耳鳴りのする静けさに鳥が鳴く
手ぶらで来た男こころを持っている
振り返えるポーズで坂をのぼりきる

橘高薫風

鰯雲びっしり俺の歯は抜ける
天来の妙音蔵す白百合は
白い服の娘に与えしは白薔薇
六価クロムの鼻木を経営者につけろ
死ぬ時は死ぬさと柿を剝いている

北川春巣

お品書き終りまで見る胃の不調
思い切り痩せて階段上られず
出嫌いがコロッと変る回復期
療養のベッドは夏の夜が長し
菊花賞　電車が混むのから楽し

川村好郎

開かないドアーを男まだ叩き
ごゆっくり言葉の裏と知っており
生き甲斐は老いの身にも燃ゆるもの
同窓会これで揃うた笑い声
怒っても詮なし月は冴えるのみ

西尾栞

かき氷ここらあたりは元廓
夏痩せの知らぬ身体で体操す
温泉に近づく電車又曲り
容姿端麗黒を着る自信
石畳雨降れば降る情緒

菊沢小松園

順番はどうにでもよい数え唄
凡人に徹す静かに風を聞く
モーニング今日は小銭の要らぬ日ぞ
父の眼を覗く子供になっている
道具屋の店曝しなる観世音

若本多久志

コクのある酒にも似たりわが余生

燃えるもの尽きて枯淡の人生か
ものわかりよい年寄りとは淋し
雑学の勉強だとはつゆ知らず
さりげない老いの言葉が刺となり

尼　緑之助

三十年歴史をきざむなだれ音
戦争はいやだと叫ぶそのかげり
戦争の怨念に会う飛行雲
赤軍の兵隊かな　マンガ読む
豪雨禍も闘争の場として動労

50年度二賞発表句会と同人総会 —川柳塔社主催—

日　時　昭和50年10月5日（日）午後1時開場

会　場　大阪府中小企業文化会館（5階51号）
天王寺区上汐町5丁目25番地・地下鉄谷町9丁目下車南300米・（電話 771・4096）

▼**同人総会は午後2時～3時30分。**（同人総会の案内状は出しませんが役員改選など出席者によって採決させていただきます）
式次第—司会・西尾栞—開会の辞・川村好郎—挨拶と経過報告・中島生々庵—会計報告と質疑応答・若本多久志—閉会の辞・菊沢小松園。

▼**懇親宴**は同会場で4時～5時（会費1,500円）同人以外の方でもご参加ください。

▼**二賞発表句会**は5時30分から

柳　　話　中島生々庵
—**路郎賞・川柳塔賞受賞者表彰**

兼　　題
「先取り」　若本多久志　選
「公　園」　川村好郎　選
「　畳　」　菊沢小松園　選
「孤　高」　西尾　栞　選

席　　題　**二題（各題3句）**

会　　費　500円
—開会9時—（投句料100円）

（ご宿泊などのご相談は本社板尾岳人までご連絡ください）

● 川柳塔社 同人句集 ●

『川　柳　塔』

頒価 1500円　　送料 160円

麻生路郎物語（10）

―こども地獄―

東野大八

阪神時代の葭乃女史と長女純子さん。バックに野口雨情先生が立つていたのを塗りつぶしたとか（大正12年）

路郎夫妻は、その五十二年間にわたる結婚生活で、四男五女の九人の子供に恵まれている。

―子煩悩がったんがったんしてくらし　路郎

―あるときは子をだんばしでくひとめる　〃

―浴漕へずらり立ったはみなわが子　葭乃

長男ロンドン一周忌に寄す

―まぼろしであったか死んだ児の裸　葭乃

―一周忌こんな蒲団で寝ていたか　〃

九人の子供は、結婚生活の前半二十年間に集中した形である。結婚した翌年四月に長女純子、その翌年の大正四年に二女御世子（かぞえ三才で死亡）翌五年に三女御幸（かぞえ三才でこの子も死亡）と年子の出産で、大正八年に長男ロンドン（昭和二年死亡）翌年四女奈那。大正十一年次男アート。大正十四年五女リリ。昭和四年三男一歩。昭和五年四男洋（三才で死亡）と年子、年子の出産歴で続いている。以上の九人のうち二男三女を幼くして失っているが、最も愛惜多いわが子の死といえば、長男ロンドンの場合であったようだ。可愛ざかりの男の子であったことが、三つの子供ばかり死なせた夫婦にとっては、最も心に残るのもムリはない。

「長男にロンドンと命名して、その名を英文で区役所に届け、戸籍係りと激論したという珍話もある。彼は家庭にあって夫人と子供を叱らない。むしろなすがままの自由である。ロンドン君の発音が英語に近いとて他愛なく笑う素直な父親である」（「大正川柳」大正12年刊・安川久流美）

世に〝死ぬ子みもよし〟というコトワザがあるが、路郎夫婦にとっては、長男出生の喜びに加え、九歳まで元気に成長をみた愛児だけに一しおの愛着ぶりであったことは、両親の断片的メモや、母葭乃の追悼句にもよく示されている。

ロンドン、アート、リリといったカタカナの名を、戸籍に登録することについては、当節ならいざ知らず、大正時代としては誰しもこのことに奇異な想いを誘ったことはあきらかである。以下は葭乃書簡に示された、母としての葭乃の感慨である。

「子供の名前は、呼ぶ時の符牒のようなものです。ですから何であってもよいのです。私は万事が路郎まかせですから、よしんば嗜みの名を苦労して寄せ集めたところで、結局、路郎の好きな名に落ちつくのですから、一人できめることにした方が手数もかからなくてよいと思うのです。子供の生年月日と亡くなった日をきかれますと、私のような子沢山には生れてきた順番さえ忘れているのですから、いずれが姉やら弟やらと、実におぼつかない記憶をたどらねばなりません。ただ、私の脳裡にハッキリ植えつけられている事

は、小児科の先生を島の内の本院や、九条の分院へまで病児を抱いて居眠りながら街を歩いたことです。

ロンドンの死後などは、何を見ても思い出の種で、車に乗っていても道を歩いていてもわけもなく泣けてくるのでした。幾日も幾日も、私はだまっていました。言葉を忘れた人のように―。そんな気づまりの時、いささかでも、私の心を慰めて呉れたのは、門下の関本雅幽という人の弔句でありました。それは

―砂手本　さぞはげむらんはげむらん

と云うのでした。

常安橋の古本屋時代には、通いの子守さんを二人雇うていました。鳴尾時代には五十恰好の所帯盛りのおばさんがお台所をきり回してくれていました。アートなどは、静岡のおばちゃんと呼んで、大層なついていました。そのおばさんが、のっぴきならぬ急用で、暫くひまを取って帰国している間の出来事なのですが、五人の子供が流感で枕を並べて寝込みました。お手伝いさんもなく、私は帯も解かず、二十日間は座ったままの看病でした。氷枕や胸の湿布の取り替え、服薬と一睡もできませんでした。西宮の主治医へ電話をかけて相談をする暇もないうちに、ロンドンの病状が悪化してきたので、鳴尾のお医者様と看護婦さんを紹介して貰い、四人の子供を二階の部屋へ隔離しましたが、ロンドンはなにかにつけて条件が悪く、とうとうジフテリヤで亡くなりました。

ロンドンの葬儀のあと、間もなくリリが中耳炎が悪化して、阪大病院へ入院しました。阪大川柳会の尾崎方正先生の手術を受けたのですが、三才の子供が頭蓋骨を削り取らねばならぬ大手術でしたので、可愛そうで、私は昼夜リリのベッドの傍らで世話をしました。

ところがこんどは路郎が腸チブスで入院してきました。私はリリを鳴尾へ帰し、そのまま路郎のつきそいで入院を続けました。リリは毎日鳴尾から祖父芦村に抱かれて、耳鼻科まで処置を受けにきておりました。私は路郎の入っている別館から脱け出し、こっそりとリリと父芦村の姿をよそ目ながら眺めてはわずかに心を慰めていたことでした。

このころ路郎の友人たちは、私達一家が、一家心中をするのではないか、と案じたそうです。私の子育ての間は、一度落ちついてゆっくり食事がしたい、一度ゆっくりと眠りこけたい、こんな単純な欲望に毎日、毎日とりつかれたことでしたが、その望みはながい間、叶えられる日はなかったのでした」

筆者が、昨年生駒へ葭乃夫人を訪問した際―談たまたま子供の話になったとき、この老女は、無然とこうつぶやくのだった。

「沢山の子を抱えた若いころの私は、いま思えば〝こども地獄〟この一語につきます」

葭乃書簡は、まだ続く。

「永い人生の迂余曲折を、考えただけでも私などはぞっとします。門下の一人がいわく〝これだけ毎日寄せて貰っているのですが奥さんはいつきてもおんなじ顔ですなあ〟

私の感情はそれほど動くことはなかったのでした。私は幾度も子供を亡くしましたが、人の前では決して涙をながしませんでした。父芦村も言いました。〝女というものは、葬式が出てからも、いつまでも泣いているもんだが、その点お前は、しよいなあ〟と。

私は軍人の妻にふさわしい、情強わな人間なのでしょうか。人前も恥じずに手ばなしで泣くのが私にはどうしてもできないのです。そこまで取り乱した自分のおろかさを人に見せたくないのです。こんな非人情な根性でいる私ですから、明日はあすの風が吹く式で、景気がよくても、わるくても気持ちの上の動揺がないのです。子供達はよく私に言いました。「お母さんは無神経だ」と。然し誰の眼からも無神経だと思われる程、何事にも抵抗を感じない姿勢にはよほどの訓練が要るのです。私は永い間にその修錬を経てきました。

―今日の私の心に嵐立ちそびれ

（福寿草より）

父芦村は、私の母の死後いつも母の命日には、納骨をした天王寺の一心寺へお詣りをしていました。一度も缺かしたことはないのです。家へお詣りして貰う菩提寺、つまり檀那寺がなかったからです。御世子も御幸も、お骨はすぐ一心寺へ納めましたから、戒名もなく俗名のままであったと思います（葭乃書簡）

葭乃書簡に眼を通しているうち、筆者は、いつとはなしに与謝野晶子のイメージが、その達意のペン跡につねにたちまどっているの

を強く意識した。晶子は葭乃と同じ堺市の出身である。晶子の娘で、里子に出されていた与謝野宇智子の出した「むらさきぐさ」は、世に秘められた歌人晶子の人となりを冷たく凝視した母を語る手記である。それによると晶子は十三人の子を生んでいる。

晶子と夫の寛との生活は貧しく、その上、子供がつぎつぎと生れた。双生児や死産、数人の子は里子に出す。晶子にとっても、まさに〝子供地獄〟のあけくれであったろう。

—胎の児は　母を噛むなり影のごと　晶子

無言の鬼の手をば振るたび

—その母の骨ことごとく砕かるる

苛責の中に健き子の啼く　〃

—生きてまた帰らじとするわが車

刑場に似る病院の門　〃

晶子は明治三十四年に結婚し、翌年長男が誕生してから、大正八年六女の出生をみるまで十七年間に十三人の子を生んだが、これだけの子の保育に、女中の手をかりようとどうしようと、母親としての厳しい現実には毫もかわりはない。

晶子の生家は羊羹屋であったが、父鳳宗七は、文人肌の読書家で、漢籍に造詣深く、俳諧に通じていた。晶子はこの父の感化をうけ、十二歳から家業を手伝いその仕事の中の唯一の楽しみは読書で、源氏物語もその齢で読破するという才気ぶりであった。

晶子が「明星」から新詩社時代の「みだれ髪」へ、そして「青踏」時代へと、その生涯を浪曼主義の色鮮やかな朱色のタテ糸で貫き通した彼女の文学思想とは、簡潔にいえばそれは「生む」という女の肉体を通して知った地を這うような身の重い生活現実からふりあおぐ空想領域。天翔ける想いそのものではなかったか。晶子の性の強さはここにある。

昨年十二月十四日付の葭乃書簡にこうある

「家族の者が病気にならない日といえば、一カ年に一カ月もあれば上々だったのです。もし私が晶子さんのように双生児でも産んでいたら、とうの昔に私という者は消えてなくなっています。晶子さんは根性の座った強い女性ですけれど、私にはそれがちっともないのです。人目からはさも暢気そうに見えてます偽善者なのでしょうか。

この世の中に生を得て悩みのない人はおそらく無いでしょう。悩むなという事は、死ねということに等しいのです。拙句

—舞扇もてば霞も十重二十重

という心境で暮していきたいのです。だから私は人生の暗い面は、なるべく覗かないようにしているのです。すべて悩みの素因となるものは、気前よく切り捨てて終います。いわば体裁のよい隠遁者なんです。鼻持ちのならぬ卑怯者なのです。だけどそれが私の性分なら仕方がないでしょう。路郎が私によく言いました。〝お前ぐらい人の言うことを真面目に受ける者はない、楽屋丸出しにするものはない〟と。私を一番よく知っている者は、路郎です。」

筆者は晶子の娘の書いた「むらさきぐさ」を生駒へプレゼントしたわけだが、彼女はその読後感をつぎのように寄せている。

「到着の本、夕方から夜中へかけて読み終りました。あれを読んでいますと、私も子供に何も言わないところなど、一寸晶子さんに似ているような気がします。実際に夫から言うてくれたようなことを二度くり返えさなくてもいいわけですから、私も人にしゃべらせておいて黙っている方です。家のものにいわせると、たとえ一言でも母の言葉があれば子供（里子で育てられた）が満足するというのです。血を分けた子供にそんな形式的な社交辞令が要るのでしょうか」

葭乃もまた晶子のように、二人の子供を里子に出している。四女奈那、四男洋である。

「葭乃の性格は内剛外柔である。だから誰にでも一応よい奥さんとして認誠されている。従って敵というものがない。時にはキリスト教の殉教者のように、彼の女の持ち味だと思われる内剛すら教養の力で抑圧しているようである。このあらわれが「福寿草松に従いそろかしこ」になったのかも知れない。（中略）ただ牡蛎の如く黙りこくってわが道を往く彼の女は、それで充分幸福と感じているらしい。一見東洋的な諦観的なげやり的な態度にも見えるが、それは彼女の無口のせいであって、彼の女自身の創造する神様への忠実な奉仕者であることは、彼の女の句に親しく接したら氷解するであらう」（葭乃句集〝福寿草〟序文・厥生路郎）

美博清

誹風柳多留廿五篇研究

—（七丁）—

室山三柳・紀内恒久・入江勇
青木迷朗・清博美・西原亮
八木敬一・鈴木黄・岡田甫

120 **色直し緋絽を着て来る面白さ**

室山—婚礼における「色直し」は、現在でも行なわれているが、当時は、白無垢を色模様の小袖に着かえるのである。

色直し迄は仲人きん酒なり　天二・礼2

しかし、着替えたものが「緋絽」となると、

色直しろに成ッて来ル面白さ　二三・8

で、吉原八朔の句である。

入江—賛。すなわち白無垢を着た遊女が、いよいよ色直し、実は床入となって絽の緋縮緬の腰巻に成って来るから、客たるもの面白いどころではない。胸はわくわく。

清—吉原八朔説に賛。

八木—同前。白無垢を脱いで、今度は緋の絽を着てくるのであろう。それを「色直し」といった所が面白いのである。

岡田—諸説に賛。

121 **そうこうへ首尾よくまたき嫁河原**

室山—「そうこう」は草冠。十八歳が前厄。二十歳が後厄。十九歳の大厄を無事にすませた嫁が川崎（大師河原）平間寺の厄除け大師へお礼参りに行くのである。

入江—賛。

御礼参りおば廿チに成ってから　二三・4

八木—賛。

取ッて廿チに成やすと運のよさ　籠三・1

岡田—同。

122 **生カして金を遣ふハ時花医者**

室山—「金を生かして遣ふ」の諺を使って、病人を「生カして」「金を」もうけ、生きた金のつかい方をする流行医者である。

八木—「死に金」に対し「生かして金を遣ふ」と云った面白さ。

岡田—同。

123 **もっとこっちへよせといて月の事**

室山—吉原の女郎の月見の無心。

さへた返事をする迄ハつめる也　籠三・21

ねかさない晩あんのじゃう月の事　一二・38

といった次第。

八木—賛。寛政八年秋から八月十五日の紋日は残るが、九月十三日の紋日はなくなる。

岡田—同。遊里では紋日、物日といって、その日には莫大な特別料金を客からサク取した。吉原の八月十五日の月見などは最大の紋日。現代ならキャバレーのクリスマス・イブの如きもの。パーテー券を押しつける。

124 **年立帰りうっとしい嫁を見る**

室山—持参嫁の句。「年立帰り」は、「けさ

よりや春は来ぬらむあらたまの年たちかへり霞む空かな」（藤原為世）の文句取。句は、歌や詞書とは大違いの新春。

岡田—同。

125　**初杰魚直を聞てかう物でなし**

室山—初鰹は、実際値を聞いて考えてみたら買えるものではなかろう。

なんぼじゃときけば鰹の直ハ出来ず　一一・9

入江—賛。

本性で附けては出来ぬ初鰹
初鰹そろばんのない内で買ひ　傍二・14　拾一・16

岡田—同。

126　**暑い事重子だんすて蝉が鳴き**

室山—「重ね簞子」は、二つ以上重ねて一棹とした簞子。

通り丁うろたへて来た蟬の声　二・21
たてかけた長持へ来てせみがなき　一二・11

後句は虫干の句であろうが、主題句は蟬が間違って室内に入り、たんすにとまって鳴き出したのである。

入江—屋内で鳴いたとて一向に差し支えはないのだが、中七が落ちつかない。土用干でカラ簞笥を外に干して置くから、蟬公のご到来とは相成ると考えた方が自然のようだが。

八木—賛。但しあまりはっきり情況がわからない。

青木—礎稿賛。酷暑の暑苦しさの最なか耳元の重々しい重ねだんすで蟬が鳴いたと言う発見、発想がこの句の手柄で、蟬が鳴いた事で一瞬暑さを忘れたかも知れぬ。だから虫干と限定しなくてもよいのではなかろうか。

岡田—虫干説はどうか。虫干のときは主として屋内にナワを何本も渡し、それに衣類をつるす。よほど湿気のひどい家でない限り、タンスを動かすことはない。むしろ虫干でない普通のときに、蟬が迷い込んでタンスにとまり啼き出した…と解した方が面白いと思う。

・近作・

今治市　月原宵明

親類の数新盆の指を折る
うっかりと愛想笑いが出た悔み
猜疑なお烈しくつのる鳩時計
枯草へまた保護色という演技

大洲市　米澤暁明

時おりは見に来て欲しいあなたの子
初めての富士がすっきり晴れてくれ
無人駅蛍に迎えられて下車

岐阜市　市川鱗魚

気短かねこの人芯の出たシャープ
故郷はいいな子供がすぐ跣足
一本気男の賽は前に振る
正直と貧乏神が手をつなぎ

東京都　池口呑歩

当ったらどうしようかと籤を買い
籤買ってそこにいそうな福の神
逆立ちをしても当らぬ籤を買い

今治市　長野文庫

世の中が見えて人生坂ばかり
人生の峠分らぬままに越し
気象台よりも確かな雲の声

お役だてください
アリナミンA®
タケダ
効能＝肉体疲労時・妊娠授乳期・病中病後のビタミンB_1補給。脚気。神経痛・筋肉痛・腰痛・肩こりの緩和。
☆食後すぐおのみください。☆25ミリ錠。

50年度路郎賞、川柳塔賞

受賞作決定

中島生々庵

ことしは少し早目に台風がやって来たが、8号9号が近づいているそうで、蒸し暑い日が続く。例年こうした条件のもとで、この二賞決定の最終常任理事会が持たれる。9月4日の夜であった。50年度の路郎賞は第10回、川柳塔賞は第9回である。定刻前から全選考委員極めて緊張した面もちである。

やがて、例年の如く各選考委員から推せんされた句を、編集部の一三夫氏が、選者名も作者名も伏せて清記したものを常任理事会に提出、最後に主幹が路郎賞の優秀作と準優秀作二句を決定した。

各選考委員の長日月に亘るご苦労は、年々その度を増し、又主幹の最終決定も、名人戦対局の長考に似たかまえである。

受賞作句者に心からお祝を申上げると共に益々ご健吟を祈る次第である。

簡単に路郎賞優秀三句に対する私の選後感を申し述べておく。

路郎賞受賞作

悔のない汗　千金の夢追わず

米子市　林　瑞　枝

最終の決定選考をしながら、ふと私の頭に浮かんだ和歌がある。有名な藤原定家の「春の夜の夢の浮橋とだえして峰にわかるる横雲の空」である。どうした理由かいまだに自分でも判らぬが、全盛をきわめた平家が滅び、鎌倉幕府に移るという日本の歴史の中のきびしさを親しく見聞した定家の時代にも似たあわただしい現在の日暮らしの中に、この作者が言う千金の夢とは何か。いろいろ複雑な心境をつつましく胸に秘めた表現の老巧さを頂く。

同準優秀作第一席

花芯をのぞいて花を哀しませ

富田林市　岩田美代

一寸した好奇心か、持ち前の世話好きか、或はきざな、もの知り顔か。それにしても何のために他人のプライバシーに触れようとするのか。名も知らぬ路傍の花であっても雄芯雌芯のいのちがひっそり秘められているものを。美代調のハイライトである。

同準優秀作第二席

生きてゆく蟻に日向も蔭もなし

神戸市　小浜牧人

一生懸命、他をふりむくひまもなく、五風十雨、おいといなし。これでこそ蟻の思いも天に上るという言葉が生れる。しかし、一面

50年度路郎賞受賞作

悔のない汗　千金の夢追わず

鳥取県米子市花園町五三

林　瑞　枝

略歴

昭和四十年頃より日本海新聞柳壇に投句して選者森田若人先生の指導を受く。昭和四十二年、川柳塔杜近作柳樽へ投句し初歩教室にて指導を受く、その頃上阪して不二田先生にお会いして柳話を聞く機会をもつ。昭和四十四年川柳塔社の大蔦川柳に投句し故白柳先生生選でベストテンに入り上阪、出席し好郎先生、栞先生のご指導を受く。同年川柳塔社同人となり現在に至る。当地にて女性ばかりのきやら木川柳会を結成して新年句会、忘年句会を催して山陰の柳人にお集まり頂いています。主人は食品会社代表取締役、家族は主人、老母、息子夫妻、二才の孫、六人暮らし。

兼好法師も言ってるように、「蟻のごとく集りて東西に急ぎ、南北に走り、結局は老と死ではないか」。こうした無常観が、この句の裏にもしのびよっていることを見逃してはならぬ。（春巣氏の原稿が締切までに到着せず）

路郎賞候補作品

（到着順）

正本水客

春の海のたりのたりと汚染され　中川　晃男
哀しさも女は食べてまぎらわし　垂井千寿子
逆いたくて終日ガムを噛んでいる　河野　君子
叱ってるうちにだんだん腹が立ち　増田次章
意気地ない姿で振子止ってる　森田カズエ
留守居の嬉しさ何しよう　そんな日も　錦織　文子
個性的でんなと軽くあしらわれ　竹内　翁童
足の向き変えれば向い風となる　時広　一路
すねているように老婆の草むしり　越智一水
手を振ってしまえば過去の人となる　川上　大輪

準優秀作

生きてゆく蟻に日向も蔭もなし　小浜　牧人

優秀作

ダムの水抱かされて山　腑に落ちず　大矢　十郎

☆

若本多久志

推薦優秀作

悔のない汗　千金の夢追わず　林　瑞枝

準優秀作（1）

其の功を語らず乳房うなだれる　増田　竹馬

準優秀作（2）

陽のぬくみ両手に受けて秋惜む　堀江　正朗
佳　作
眉描いて女哀しい性をもつ　小出　智子
黄金色の秋を信じて離農せず　小林孤呂二
ちっぽけな善意でもよし心満つ　高橋　操子
ふるさとの風もなみだを拭いてくれ　本間満津子
帯しめて炎えるものあり　秋ひそか　河野　君子
父の椅子座れば父の温み　河股　緑水
朝配る少年朝の街が好き　岩本雀踊子

年間を通じての十句推選に今年ほど苦しんだことはなかった。それは選洩れの四、五句が入選十句に遜色のない作品であった為で、言わば、嬉しい悲鳴であった。

☆

西尾栞

特　選

花芯をのぞいて花を哀しませ　岩田　美代

準特選

セット少しくずして私の顔にする　高橋千万子

準特選

生きてゆく蟻に日向も蔭もなし　小浜　牧人
作家の妻いつも背中へ話しかけ　不二田一三夫
つまずいて起きてわが道らしくなり　水粉　千翁
美しい夢でありたい距離に居る　錦織　文子
手袋が霜を掴んで落ちている　岩田　美代
幸せがいっぱい老婆熟柿吸う　香川　酔々
走ったら間に合いますと灯を消され　山内　静水
種火だけ残す夫婦の共稼ぎ　岩本雀踊子
にっぽんも禿げて来たよと渡り鳥　稲田豊作
友達の目が同性の目に変り　小出　智子
五十坂ある日ある時ある焦り　玉置　重人

（評）

毎年、大暑の七月にこの仕事が廻って来る。反対療法の銷夏法であるかも知れぬ。一年間、一万句に垂々とする中から、一句を選出するのは、どだい無理であり、神技にも等しい。牧人さんの蟻の句は水客、好郎、栞、の三人が抜いている。然し一昨年既に受賞者である。文学には、そういうことは許されない。然し特選、準特選、その他の句とは全く紙一重である。そういう時は、前後の事情も考えねばならないだろう。特選の句は、水客、栞とが抜いている。二人の好みの句と言えば、云えるかも知れぬ。然しこの句には常に発表される、岩田美代氏独特の一貫したユニークさがある。所謂作者の個性が決定づけられた、安定性を頂戴した。準特選の句は、好郎、栞、がいただいている。大変穿ちのきいた、女性は勿論男性も異議なく共感すると

ころである。特選からみればむしろこの句の方が川柳であるかも知れぬ。然し作者独特の個性が欲しい。洵に残念ながら、準特選にさせていただいた。

マラソンや囲碁、将棋のように、勝負がはっきりしていないだけに、選者たるもの折も折、熱い汗を流すものである。

☆

川村好郎

推　薦　句

生きてゆく蟻に日向も蔭もなし　小浜　牧人

倖せと思えば足りる箸をおく　河股　緑水

セット少しくずして私の顔にする　高橋千万子

其功を語らず乳房うなだれる　増田　竹馬

新聞の休み腹立つ活字見ず　大坂　形水

足元を見よとは下り坂のこと　西　いわを

紫陽花の心の彩を聞いてみる　岩田　美代

憧れがとどかぬ虹で美しい　島居　百酒

身を守る女に鍵は一つです　宮西　弥生

老いの惑い愛のことばの重み知る　和田維久子

☆

菊沢小松園

こんな時の私が嫌いで顔洗う　岩田　美代

新聞の休み腹立つ活字見ず　大坂　形水

喋りたくなればとぼとぼ峰歩く　板尾　岳人

恋人が出来たを花屋知っている　小浜　牧人

手を振ってしまえば過去の人となる　川上　大輪

悔むまい明日のページは真白だ　高橋　夕花

ひとときの天下を取らす夕桜　森井　菁居

ひな人形女ひとりを笑ってる　野坂つき子

自分から刺しには来ないバラのとげ　川口　弘生

秀

ひきながらひきながら潮　満たんとす　八木　千代

秀句一句には苦んだ、沖縄に海洋博があり、大陸棚の問題、何かしら世界中が海に眼を向けている年、この句も時流を掴んだよい運に恵まれた句と言いたい、現今のアメリカ外交の本命をすげり突いて居るような女の句としては示唆に富んだ佳句として本年度川柳塔の代表として推した。

一分間の柳論

若本多久志

川柳作家達の集りで「川柳人口が一向に増えない」との詠嘆をよく聞くが、ではどうすればそれが可能かといわれても、具体策はちっとも出てこないのである。それは何故だろうか…思うに、柳歴が十年、二十年の指導者級作家になると、それぞれ独自の句境を打ち立てて精進している為に、初心者のいわゆる「その通り川柳」や「説明川柳」の添削に力を入れていると、自分の句が荒れてくるという理由で、ついつい川柳人口の増加を怠っているのではなかろうか。

だとすれば余りにもエゴイスチックな川柳家だと言わざるを得ない。よく「俳句百万川柳十万」とその作家人口をいわれてはいるが各新聞や雑誌の柳壇、特に時事川柳に大変な興味をもって読んでいる、作らない川柳家は俳句のそれを上廻る人口だと思う。こうした人々を作家の域まで拾いあげてゆく努力こそ我々に課せられた使命ではなかろうか。自分達がこの畑に入った時を考えてみよう。

まるで夢のよう

林　瑞枝

留守中に栞先生からご入賞おめでとうとのお電話があったと娘より聞かされた時、この頃川柳を遠のいている私に、入賞なんか誰かの間違いでしようと信じられず栞先生へお電話申上げるのがこわくて受話器が持てませんでしたが、翌日不二田先生より路郎賞に決定したことを報らされてまるで夢のようでまだ実感が湧きませんそのうち家族と乾杯を致します。川柳は人間陶冶の詩と申します。毎日主人の地道な働き振りを見て、「一躍千金の夢なんか私たち一生持てないわね」と話していたものを句にしました。細々乍らもこんな生活の詩を川柳にして一生続けようと思い直しました。

50年度川柳塔賞受賞作

末法の世の新聞をたたみけり

安藤寿美子
豊中市岡町北一―十―二十三　電話〇六・八四一・二四八七

略歴

昭和四十六年秋、戸田古方さんの川柳講座で手ほどきを受け以後豊中川柳木曜会のメンバーとして勉強中。府警機関誌の川柳で麻生葭乃先生のご指導を受けました。今春長男が結婚、老中若三夫婦に一女同居という大家族の主婦。

川柳塔賞候補作品

戸田古方

工場の橋に暮しの詩がある　武内　雅堂
腹が立ち拾った石は丸かった　谷口あきら
末法の世の新聞をたたみけり　安藤寿美子
太古から虫は一つの顔で生き　柴田恵美子
捨られた日から人形自由です　小谷　葉子
一つ齢重ねた昨日と同じ今日　宮尾みのり
順調のように見えても影はでき　園部　正則
尼の爪やはり女としてのびる　梅本登美也
はりつめてはりつめて風船われる　香川亜成
反抗は毛虫の頃の話です　高橋　古啓

〇川柳塔賞推薦句

末法の世の新聞をたたみけり　安藤寿美子

さほど目新しい句とも思いませんが、上五の「末法の世」がたくみによく利いています。初代の鴈次郎は大の新聞ぎらいだったそうですが、真実を伝えるはずのマスコミの功罪にうんざりさせられる今日このごろです。

☆

大坂形水

子燕に野良へ出る戸を閉めきれず　岩下照沖
屋上の風に聞かせるひとりごと　松本　文子
動かない金魚は冬を思案する　勝山　柴宏
生きること教えてくれた人が辞め　島田昭治
末法の世の新聞をたたみけり　安藤寿美子
別々の色をさがしている夫婦　宮尾みのり
はにかみは真珠の艶のしたたりか　白岩文衛

準優秀作第二席

鴉の目柘榴割れる日知っている　梅本登美也

準優秀作第一席

白杖の先で大地に話しかけ　岸本豊平次

推薦作

建てかえる役所の窓は高くなり

川柳塔賞受賞作

末法の世の
新聞をたたみけり
豊中市　安藤寿美子

準優秀作第一席

鴉の目柘榴割れる日
知っている
松江市　梅本登美也

準優秀作第二席

朝の靴働く方へ
向けてある
名古屋市　大林曲ん手

☆

橘高薫風　大垣たもつ

川柳塔賞推薦作

朝の靴働く方へ向けてある　大林曲ん手

同準優秀作品

末法の世の新聞をたたみけり　安藤寿美子

病院長逝去他人の病院で　堀口　欣一

蓑思いつめ思いつめ　谷岡　芳枝

缶ビール車窓に映る僕がいる　古谷　恭一

鈍行はたのし日が落ち月が出る　堀口　欣一

円満の秘訣のよう鍋煮える　梅本登美也

舞う雪が波に抱かれる十勝川　池田　露子

前衛も松の緑を初春にいけ　岸本豊平次

老齢年金これが金脈とは淋し　秋月　宏方

〔評〕大林曲ん手、安藤寿美子両氏の作品は三人の選者が斉しく推薦している。「朝の靴」の句の気合いの籠った清新さは隙がない。

「末法の」の句は、語尾が冗漫に流れたので、怒り憤りは感じ難く、諦観としても訴求力が稀薄になった。「病院長」の句は、作者の川柳眼の卓抜さを感じさせるもので、表現にも無理がない。他に、池田露子氏の「舞う雪が」の北国の荒々しい冬の情景描写と、梅本登美也氏の「円満の」の句の円熟した味に感銘させられた。

選衡過程

三選者の推薦作品と、平素の成績を考慮して、すらすらと決定した。大垣たもつ、岸本豊平次氏らは準賞に遜色がなく、次の機会を待って精進をお願いしたい。

☆

九月四日の常任理事会は例年のように二賞決定の日になる。全句の原稿はこれも毎年のようにぼくが金庫がわりに預っている。結果はまた山陰へ路郎賞が飛んで行った。

推薦作一句、準推薦作二句という牧人氏が圧倒的に強いとみていたが、決定の選は一句ずつなので、推薦句はみな五分と五分というわけ。美代さんも有力だったので久しぶりに路郎賞は大阪へ—だが今年もダメだった。

出席—生々庵・多久志・柳志・水客・静馬・古方・文秋・いわを・栞・薫風・形水・太茂津・小松園・一三夫諸氏。

一分間の柳論

市場没食子

近頃互選や共選が余りない。互選はともか く、共選はあった方が私は良いと思う。

川雑菊版時代選者に推されると、一路集の共選々者から出発した。A選者に抜けた句必ずしも、B選者に抜けない所に、各選者の個性や好み、選句のポイントも伺えて妙味がある。例え平抜きにしろ、どの選者にも抜ける句が、佳句だとさる先輩に聞かされた。

世の変遷と共に川柳の姿も質も向上したが、川柳人口の増加は、遅々の憾みがある。質の向上も肝心なことだが、同好の士の獲得も必要で、若い人達にアッピールせねばと、私は思う。共選がそんな大役を果すとは思わないが、初心者に興味を持たせる一助にはなるのでないか。

各柳誌のトップ級選者の共選は見ものだと思う。題詠吟ではないが、本誌の路郎賞、川柳塔賞の選は、中間発表が待遠しい。担当選者の熱意に謝し、その労を犒いたい。

夢のような

安藤寿美子

「最近スランプです」といえば「そのスランプを句にしなはれ」と古方さんのお言葉。

水煙抄投句がやっという頼りない私が賞をいただけるなんて夢のようでございます。

夫が警察官ですので新聞には人一倍ハラハラしたりゴマメの歯軋りをしたりという日常からあの句が生れました。

虚子俳話にある平明にして余韻ある句というのはそのまま川柳に向う私の姿勢でありたいと願って居ります。

・同人吟・

秀句鑑賞

——前月号から——

若本多久志

詩にされた義理で椰子の実流れつき
小砂　白汀

近頃は潮流の変化で、余りヤシの実も流れてこなくなったが、島崎藤村が伊良湖岬で詠んだ詩に対するアイロニーだと思うが、中七がよく利いて面白い。

しまい風呂　今日を心に問う鏡
林　瑞枝

ある時は無智も倖　瞳をつむる
和田維久子

投げられた石の痛さに耐えておく
榊原　秀子

母に似た古い女の鍵を持ち
高橋　夕花

前掲の四句、いずれも、日々煩らわしい家事に従事する主婦の句であるが、共通する点は、つつましやかな生活の中にも更に、自己を見つめる謙虚な態度とその心境を詠まれていることで、珠玉と言えよう。

父の影やどす娘の男性像
川口　弘生

幼児の頃、父親によくじゃれつくのも女の子であり、長じて恋をするときにも父親のイメージをその男性像に求める。父と娘の微妙な心理をうまく捕えた句である。

ボーナスの日の微笑みは仕舞つとき
小林孤呂二

はかないひとときの倖せではあるが、サラリーマンでなければ味わえない境地か？

煩悩無尽　生きてる証拠明らさま
野村太茂津

さればこそ、「悪人正機」の正法を、親鸞聖人は説かれたのであろう。

おふくろの十指は弥陀の掌にも似て
松下　梁水

おふくろの指と仏陀の掌を、大胆にも同じランクに並べての礼讃は、さすがベテラン作家の句である。

忘れてた土の香りが指にふれ
岩本雀踊子

現代生活のあらゆる面で、原点に帰る必要を呼ばれている時、ふと、この句が生れた作者の心境を尊く思う。

重なった蝿へためらうハエ叩き
増田　竹馬

いみじくも、複雑な心理をためらわず、スラスラッと詠まれた点に敬服。

清貧を愛し一輪ざしが好き
越智　一水

日本の、古きよき言葉が、段々失われてゆく現代、この上句の言葉につながる一連の句意に襟を正すのは、果して、明治生れの我々だけであろうか。

お寺さんずかずかと通られる
吉田　水車

雨宿りしたのに自動ドアがあき
横山　一声

集団ではえた白髪はもう抜かず
宮尾あいき

全没の句会忘れものしたようにたち
新岡回天子

時の川柳八月号に、主幹の三条東洋樹氏が「捨てられぬ句境」と題したエッセイを書いておられるが、筆者も全く同感であり、前出の四句もそうした意味で頂いた。

日本は倖せ　やせる本売れて
松本　昌

世界中の食べものがなんでもある日本、倖せ過ぎる暖衣飽食の果ては、やせる薬、やせる本にすがる日本人への風刺が、ピリッと利いている句。

万燈抄

菊沢小松園選

出るとこへ出ればいい子になりたがり　尼崎市　中谷利美

指先の器用がとんだ罪つくり
老らくのデイトは京の味めぐり
終盤の緩手風雲急を告げ　寝屋川市　柴田恵美子

カルダンの名儀料つくシャツ贈る
小さな親切が活字になっている
神様の都合でチャンス早くなり
愛をうばわれ尽くし夏終る　大和高田市　岸本豊平次

にわか雨用心のよい傘が行く
笑いにも視線が刺さる精神科
子雀にやんちゃもいるか巣から落ち
あの時はあれでよかった気の弱さ　三重県　川上富子

夕立へけたたましくも下駄が鳴り
かぶと虫囲んで母と子の世界

濡れた目へ叱り過ぎたを悔いている
虹を見るその眼天使になっている　柏原市　小谷葉子

一筋の道を愛してカンナ炎え
死ぬ時も花の宴の夢を持ち
ハンガーに吊ると道化師泣けてくる
無花果が熟れて一つの愛終る　鳥取県　加藤茶人

又今日もラッシュにもまれる靴みがく
特急の身ぶり手ぶりにさせた窓
秀才の理論はネギの値も知らず
亡父までも踊りに誘う夏祭り　和歌山市　樫村ふみよ

同じ種まいて双葉の出来不出来
飲む酒が生む毒舌へ尚もつぎ
選挙戦ワラをもつかむ手の握手
置かれても置いてもこまる冥土ゆき　西宮市　井上のぼる

荷を解けば親の情が詰めてあり
耐えるほか知らぬ男の丸い背な
バラ色のビジョンへ寡婦を捨てました

島根県　谷岡芳枝

すねた眼が女心をうちあける
野良猫の叱られながらよく育ち
不景気の蟻も残業して居らず

鳥取県　伊藤静枝

老いて子に任かす諦身に迫る
桐下駄に素足でわたしとりもどし
子に職がまとまる知らせ独り酌む

豊中市　安藤寿美子

サングラス人目をしのぶ仲でなし
方円の器をあふれる水である
衛星が写した雲がここへ来た

和歌山市　西山幸

カレンダー写楽と毎朝顔合わす
炎天に向日葵強く咲き終わる
当らない八卦貧乏つきまとい

鳥取市　有田鹿の子

夫の初盆

好きな酒つめてたっぷり墓へつぎ
初盆の墓に桔梗も首を垂れ
約束のはかなさ夢を抱いて寝る

七尾市　松高秀峰

子の不運親の不運の後編か
尋ね犬金のある人やはりあり
血圧の薬と仲良く生きており

新潟県　市川一峯

穂の出来よくて台風気にしだし
一瞬の出来ごと一生車椅子
氷屋の汗は涼しいように見え

八尾市　納史葉

ライバルの不遇聞いてる廻り椅子
要領のいいのも交る蟻の列
持て過ぎた男が六法借りに来る

西宮市　朝山千世子

蟬しぐれ今日の暑さを告げにくる
ひまわりに燃える若さをもう一度
猫の声寡婦も女よ夜が白らむ

広島県　原田篤史

晩酌の徳利が重い日のあせり
若鮎の焼くには惜しい肌の色
無人駅ホームに季節の花さかせ

和歌山市　桑原道夫

教会へ小便かける釜ケ崎
笛持てば笛で指図をしたくなり
煙出ているタバコで道を教えられ

大阪市　秋田茂

理屈を言っても僕は猿の孫

イルカの背中に自由がおどってる
ブランコを押してた兄にもどりたい
今治市　今井松花

生き抜いて歴史が重い倉の町
里の親よりし易いと嫁笑う
値上げまで吹い置きをして止めたろか
今治市　真山国彦

暑さ寒さもふるさとが良い
フォークボール投げて女は横を向く
三役が負けてテレビの前を立ち
岡山市　船越洋之

デパートのコンピューターに招かれる
弁当に妻は機嫌を詰めはせぬ
円満な人と言われて利用され
愛媛県　島田兼孝

死なんのが不思議であった魔のカーブ
噂さでは死なはったと言いふらし
現場見てびっくり運のよい親父
吹田市　藤原世史春

偉丈夫がこんな小さな本になり
八本の足に生死を賭ける蟹
台風で儲ける人もありはあり
島根県　松本文子

荒海に叫けぶ言葉はかえらない
ふるさとへタイムカードを打ち続け
今治市　伊藤一郎

シャボン玉屋根越えるのはそもいくつ
グイグイと飲んでさっさと寝るフェリー
富田林市　中村優

三十年悪夢が戻る長い夏
暑中見舞活字の衣脱がせたい
今治市　大本バット

虹の松原脇見もせずにぶっ飛ばし
民宿でおふくろの味思い出し
愛媛県　小山悠泉

心では親に詫びてる反抗期
七人の敵の一人に無二の友
滋賀県　柚木踏草

偶然のチャンス逃がしてから悔いぬ
長生きの愚痴爪が伸び髪がのび
羽咋市　三宅ろ亭

月見草の可憐さ日本少年のころ想い
秋胡瓜の自主性這いたいままに這い
大阪市　堀口欣一

下鴨の森へ京都の人は来ず
白桃を剝くとき心よぎるもの
松江市　梅本登美也

怠け者　一人もおらぬ　蟻の列
二つ三つ　仇花　咲かせ　嫁に　行き
松江市　本庄快哉

幸福行天国行もあってよし
役人とわかるネクタイ締めている　伊丹市　樫谷漫柳

訴える赤字に似合わぬ多色刷り
泡の分損したような生ビール　姫路市　大原葉香

タンポポの横着種まき風にさせ
これが北海道か大地へ一歩確める　岸和田市　池田露子

詐欺だとは裸にされるまで知らず
訴訟には勝っても海はもどらない　名古屋市　大林曲ん手

自由席妻の隣へ掛けさせず
朝風呂の外に望まぬ父は老い　岡山県　長尾保

花の香を胸いっぱいの白い杖
徳用米の味しか知らぬ市民です　大阪市　水谷フジ子

夫竹荘逝く

もう愚痴も聞いてもらえぬ人思う
浮気にも天下晴れての旅をゆく　大阪市　新川貞祐

果物の皮さえむけぬ赤い爪
採血検尿マウスにされて生きている　備前市　武内雅堂

被戮者の胸に棲みつくきのこ雲
踏切りを越えると月に見られそう　弘前市　小山内貞男

招かれて以下同文であしらわれ
農村の子供もパンの味を知り　橋本市　森脇善彦

手持ち無沙汰何を成すかを知らぬだけ
傍観の気軽さだけは吐くでない　今治市　古野伶人

長崎・平戸・唐津

ザビエルの傍にジャガタラ娘立ち
虹の松原歩いてるのは俺一人　須賀川市　平栗金太郎

流れ星消えて二人の愛終る
清濁を併せ飲めずに雑魚になり　大洲市　宮尾みのり

ひまわりの最後敗残兵に似る
すがったら一緒に溺れそうなので　寝屋川市　江口度

釣れ過ぎるとだんだん無口になってくる
腹の出た妻がズボンはくとゆう　鳥取市　岸本無人

若ければ俺も長髪叱るまい
鈴つけて貰って猫のひとりぼち　兵庫県　高橋近江

雑草の執念土のある限り
日記へは書き残せない今日のこと　宝塚市　吉田とんぼ

にくまれ口言う病人の脈たしか
付いて来る犬へ小石も投げられず　熊本市　有働芳仙

前置きがながく無心を見抜かれる
親探す間を迷子は泳いで居　島根県　岩田三和

ご先祖が気絶しそうな盛り合せ
わすれてはならない悪魔キノコ雲　松江市　岡崎雪美

親という名の枷墓場の中までも
迎え火にこうろぎ一緒にないてくれ　橿原市　西本保夫

不況と言う名で昇進もストップし
特命の仕事へ月給変り無し　新見市　吉田落猿

死をさそう風ともみえず通りすぎ
お迎えがいつ来ようとも平気です　倉敷市　高山みどり

はじめからしまいまで花の長話
盆供養源氏の系図子に見せる　諫早市　江副二牛

海の子がプールで泳ぐ埋立地
親の夢子の夢いつかくい違い　島根県　堀江蓮露

平常着を着たい日もあり錦鯉
若者の思想を変えたきのこ雲　豊中市　高橋古啓

約束は必らず守る判が要り
黄昏は通勤電車の窓の外　東大阪市　崎山美子

水しぶき真夏の恋を育てあげ
あきまへんまあまあでんなにビルが建ち　大阪市　平井露芳

長髪族夏の暑さも苦にならず
彦九郎ビルもついでに拝まされ　大阪市　横地正彰

特急の別れは手を振るだけのこと
渋滞車人それぞれの性で待ち　唐津市　山下勝一

停年のない天皇もお気の毒
音たててしめる障子の意思表示　唐津市　田口虹汀

夕涼み踏むのにおしいホーキの目
値の安い汽車ほど窓があく仕組み　河内長野市　井上喜酔

虎の子は四ツに折って定期入れ
ビヤガーデンまさかと思う顔と会い

大阪市　花田繁子
云いにくい事ずばりと若い人
取り越しはやめるなるようにしか成らず

尼崎市　駒村岳麓
嫁ぐ娘に教え不足の母心
夢を持つ夫婦今は貯金だけたより

八戸市　安田紘
色眼鏡とれず老眼なおとれず
パチンコの玉がよく出る日の孤独

大阪市　内藤ますえ
青空を取りもどしたい公害課
電化よし自然の風のよさも見直す

堺市　堀畑日日子
薪能炎へ遠く虫の声
男性の理解がほしいと言う本音

羽曳野市　麻野幽玄
見比べて負けたダイヤは指して居ず
老眼鏡やっぱり見たいものを追い

鳥取市　徳田水滸
たしなみといって老妻髪を染め
ほどほどにごねて妥協の機をねらい

高槻市　山田スミ子
ちぐはぐな返事私を困まらせる
叱るだけ叱ったが反応出てこない

岸和田市　池田香珠夫
合鍵を互いに持ったまま別れ

堺市　栗本藤持
屋上へ続く根気は蟻の道

尾鷲市　渡辺伊津志
昇任の階級章を見る鏡

高槻市　竹内花代子
それぞれの団扇で患者涼をとり

新宮市　西尾功
犬かきが得意のポーズ娘は泳ぎ

尼崎市　大垣たもつ
当選の椅子で年金削ずる案

泉佐野市　大工静子
壮観に一瞬絶句ナイヤガラ

大阪市　村島秀村
涼しさに行きつ戻りつ同じ橋

青森県　波ただお
お隣もパンツ姿目で会釈

寝屋川市　福富隆子
ねころべば甘いと見たか蟻が寄り

東大阪市　野村白風
ほんものの壺は見せない御開帳

鳥取市　松本永治
速達で出した手紙がストへ会い

八戸市　島田昭治
票田が荒れて金肥をまいてやり

高知市　竹崎　寛

涙雨―それは宇宙の天使です

鳥取市　勝山　紫宏

初月給貰ったとだけ書いてあり

出雲市　高見　鐘堂

不況にも慈悲心だけは捨て切れず

出雲市　藤井　晴月

整理してこころの重荷がとけるなら

島根県　飯塚　虎秋

産院の乳房の列に気圧され

大阪市　須浦　つね

八百屋からラッキョの漬け方教えられ

今治市　園部　正則

敵視した男に対話欠けていた

青森県　荒田　つる

世にうとく夫のうわきも知らずすみ

島根県　安達　潮音

声された合じ病む身の散歩路

唐津市　三浦　広坊

さすが銀行使い込みまで億単位

唐津市　岩崎　実

工場のベルで我が家も昼となり

唐津市　田中　三男

ただ貰う風船みんなコマーシャル

唐津市　岩下　照沖

子が脊なへ書く平仮名を当てやる

唐津市　筒井　竜夫

むなしさはわが恋に似て遠花火

第九回東大阪市文化祭参加
第三回川柳大会

日　時　昭和五十年十月十日（体育の日）
正午開場、出句締切一時半

会　場　東大阪市中央公民館二階、視聴覚教室（近鉄永和駅南、市民会館内）

柳　話　「上手と下手」　堀口塊人氏

兼題及選者　（選者、雅号のＡＢＣ順）
溶ける……中山凡路氏
子　分……定金冬二氏
広　い……田中南都氏
顔……山下清禄氏
友　情……傍島静馬氏
絵　心……若本多久志氏
生きがい……梶川雄次郎氏
有頂天……川村好郎氏

席　題　二題（題及び選者は当日発表）

出　句　兼・席題共、各題二句以内（締切一時半厳守）出句は出席者に限ります。（兼・席題共当日会場で受付）

賞　兼・席題共、最優秀句に、東大阪市長・その他の賞状及び副賞を贈呈します。

会　費　五百円（呈・記念品及び大会句報）

懇親会　千円也

主催　東大阪市文化連盟
東大阪市川柳同好会
後援　東大阪市・東大阪市教育委員会

☆

▼**堺川柳会**―10月13日午後6時から「近所」「さしみ」「狂う」「点」会場―八木摩天郎宅。

▼**南海川柳会**―10月16日午後6時から「有頂天」「顧問」「勘違い」会場―南海電鉄本社食堂内。

・水煙抄・

秀句鑑賞

——前月号から——

小浜牧人

句の鑑賞は私の主観に依る解釈で行うので或は作句者の意図と相違することがあるかも知れない。予めお断りしておきたい。

句には余情の残る余韻がなければならぬ、言い切ってしまっては只それだけのことに終って仕舞う。十七文字では何程のことも言い切れるものではない。余韻を持つ事に依ってその中に味わいや大きさが読み取れるのだ。

髪を切るきのうの夢もおとといも　高橋　古啓

髪は女の生命とまで言われる、髪を切ることは現世を絶つことである。生易しい罪の償いではない。そんな夢を続けて見た。メカニカルな現代に生きている不安の現れである。

あの人の射程の中を泳がされ　小谷　葉子

わが道を行けば矢も降る槍も降る　安藤寿美子

思慕ひそと匂い袋へしまいこみ　松本　文子

妻の立場で詠んだ句、男女同権と言っても妻の自由には目に見えぬ枠がある。そして妻はこの枠を逃れ出たい願望を常に持っている。然し幸に枠を出て自分の意志の赴くままに進もうとすれば忽ち女なるが故の又妻なるが故の非難や中傷に晒らされる。世の中は思った程甘くない事を思い知るのである。また元の枠へ引返えして秘かな夢を匂い袋の中へ忍ばせてその匂いで哀しい諦めをするのである。

成仏をした顔でなし冷凍魚　中谷　利美

生捕られた魚はしまったと思う間もなく冷凍室へブチ込まれ、瞬間のうちに凍ってしまう。怨念そのものような顔になるのも当然である。冷凍を解かれて初めて成仏した魚の姿になれるのである。面白い写生句だ。

霊柩車死人が起き出しそうにゆれ　有働　芳仙

自動化になっても料金また値上げ　井上　喜酔

ハチ巻きで勝ち取る米価とはかなし　小山内貞男

いずれもそれぞれの視点から政治への抗議を突き付けているのである。

白百合の白さに耐えて病んでいる　大林曲ん手

病室の中は清潔を保つ為に目にふれる物白一色である。白の包囲に患者は強い抵抗感を禁じ得ない。未だその上に花瓶には白い百合がいれてある。病者の感情を刺戟しないようにとの思いやりの白い花であるが、病人はその白が耐え難いのである。せめて他の色の花なら救われるのであるが——

嘱託と言う職があり気を張ろう　渡辺伊津志

さわやかに生きよう明日へ夢つなぐ　藤井　晴月

あばら家に誠実の額かけて居り　島田　昭治

運命線どこかに幸福訳もある　柚木　踏草

四句はいずれも明るい希望に満ちた句である。現在は必ずしも幸福でなくても明日の幸福を信じて生きてゆく庶民の誠実な姿がうれしい。

償いの女が磨く鎖です　納　史葉

深さのある心象の句である。今月の水煙抄の佳吟であると思う。鎖とは「個」のいくつものつながりである。償罪女が磨く鎖はどこまでも続いていて終りがない。その長い鎖の「個」の一つ一つを磨いてゆく。罪を赦されるまでその作業はつづけねばならないのである。これも女の業の哀しさである。紙数が尽きましたので以下選んだ句だけ記して終ります。

人生相談すがりたいのに策がなし　みのり

濡れつばめ過去の情事は咎めまじ　千世子

反対も賛成もせず飲んでいる　一峯

てのひらの温みも投げるお賽銭　スミ子

百人一首と川柳（16）

冨士野鞍馬

五一　藤原実方（さねかた）朝臣

かくとだにえやはいふきのさしも草
　さしもしらじな燃ゆるおもひを
（後拾遺集）

―詞書に「女にはじめて遣はしける」

藤原実方は定時の子であるが、叔父の権大納言済時の養子となった。一条天皇に仕え左近衛中将になった。歌人としても名高かったが、ある年の春、東山へ花見に行って俄雨にあい、

桜がり雨は降りきぬおなじくは
　ぬるとも花の蔭に宿らむ

と詠んだ。これが評判になり、大納言斉信から天皇に伝えられたところ、行成が「歌は立派だがその所行は感心しない」と申上げた。これを聞いた実方はうらみに思っていたが、ある時、殿上で行成と口論し、その冠を笏でたたき落して庭になげ捨てた。行成は静かに人を呼んで冠を拾わせてこれを着けた。このさまを天皇が見ておられて、行成の態度をほめて蔵人に抜擢し、実方は「歌枕をみて参れ」と陸奥守におとされた。

陸奥へ赴任した実方は、名取郡笠島の道祖神の前を、人のいさめもきかず、馬に乗ったまま通ろうとして神罰を受け、馬から落ちて死んだ。それは長徳四年（九九八）であった。（古事談）

その亡魂が雀に化したという伝説があるので、川柳はそれを詠んでいる。

百へ入れたのは雀にならぬうち　柳雨（二八5）

大内の雀は陸奥の歌まくら　馬猿（四九7）

実方のおんりよう鷹の餌食也　玉章（四六25）

実方の亡霊雪に生捕られ　杜蝶（九八20）

実方を四五羽生捕る雪の朝　笑丸（五九15）

実方の雀は米に目はつけず　風松（一一九39）

などといずれも雀を詠んでいるが、「雀海中に入って蛤と成る」という俗諺があるので、

実方は再三化して千鳥焼　蟹眼（九六8）

―千鳥焼は蛤の田楽

さしもしらじな蛤になろうとは　扇風（九七13）

実方の三世は二世のかために出　楓枝（一五一25）

―婚礼の吸物

と蛤を詠み、

けんくわで所をくったのは実方　扇松（一四〇9）

実方朝臣よく見れば男なり　箱扇（一四〇12）

と詠まれている。

五二　藤原道信朝臣

明けぬれば暮るる物とは知りながら
　なほうらめしき朝ぼらけかな

この歌は「女の許より、雪降り待りける日帰りて遣はしける」と詞書して「後拾遺集」

にある。

道信は、太政大臣為光の子で、正暦五年（九九四）に右大臣道兼の養子となったが、その年二十三才でなくなった。従四位上、左近衛中将であった。若くて死んだが、その作歌は、勅撰集にも相当数のせられてある。

もてぬ夜はなほうらめしき朝ぼらけ　露舟（三一27）

という川柳は、右の歌の文句取りである。

五三　右大将道綱母

歎きつつひとりぬる夜の明くるまは
いかに久しきものとかはしる

この歌は「拾遺集」に「入道摂政まかりたりけるに、門を遅く開けければ、立ち煩ひぬと云ひ入れて侍りければ」と詞書してのせられてある。「入道摂政」とは、夫兼家のことである。

「道綱の母」というのは、藤原倫寧（ともやす）の娘で、藤原兼家の妻となり、右近衛大将道綱を生んだ人である。その頃は、女はその名を外へ出さなかったので、こうした呼び方をせられているのである。光明皇后、衣通姫とともに本朝三美婦といわれている美人であった。

兼家には、もう一人の妻があって（道隆、道兼、道長などの母）その方へ兼家の愛は移っていった。それで道綱の母は、寂寥、憂愁のうちに、あきらめの生活を送らなければならなかった。その心情を綴ったのが「蜻蛉（かげろう）日記」である。

道綱は、長徳二年（九九六）に、右近衛大将に任ぜられ、翌三年、更に大納言に任ぜられた。その増官を川柳は詠んでいる。

御増官母方のある百人首　叶（八九21）

またこの次にも母があるので、

おふくろを二人定家はすへて置き　里家（三三10）

歌の文句を借りて

いかに久しき物と知るのは草履　礫川（四四14）

—吉原で床で待つ客

五四　儀同（ぎどうさんじ）三司母

わすれじの行末まではかたければ
今日をかぎりの命ともがな

この歌は「新古今集」に「中関白通ひそめ侍りける頃」と詞書してある。

儀同三司の母とは、従二位高階成忠（たかしなのなりただ）の娘で、中の関白藤原道隆（たか）の妻、従二位貴子（たかこ）のことである。その子伊周（これちか）は、寛弘五年（一〇〇八）一条天皇の勅によって、大臣に准ぜられたので、「儀同三司母」と称した。

「儀同三司」とは、儀は三司に同じということで、三司とは、三公ともいい、太政大臣と左右大臣（後には左右内大臣）のことで、伊周を指すのである。

この貴子は、伊周の外に隆家、定子（一条帝皇后）原子（三条帝女御）などの子があって、「高内侍（こうのないし）」とも呼ばれ、漢詩文にも通じ、男まさりであったようである。

川柳では

儀同三司といふべきはつけまわし　雨譚（拾八26份三8）

と詠んでいる。この「つけまわし」というのは、吉原の准上妓のことで、道中も張見世もしない二分の女郎をいうのである。つまり三分の上妓に准ずるという意味を、准大臣に通よわせた洒落である。

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社　西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五二—四
夜間 (762) 四四〇八

愛染帖

橘高薫風選

山鳩がテッポッポと故郷明け　青森市　工藤　甲吉
銭湯で見かけなくなり死んだとか
甘えたき人黒枠の中にいる　竹原市　三宅　不朽
旅なかば旅の重さを思う霧
演技にはあらずピエロ花を買う
久しぶり子といる海の去りがたし　島根県　小砂　白汀
禿鷲の肉はそのとき誰が喰う
海溝へ沈められるは極刑か
火柱を立てて天と地抱き合い　池田市　杉田絵巳子
愛憎の生き身をまとう絽が透ける
人恋いのペンゆきづまる濃紫陽花　岡山市　行本みなみ
神の真似神父の微笑すぐ凍る
雨垂れをかぞえて体臭が強くなる　東京都　山根　白星
張りぼての石この人も重く持つ
奇術師のその后の鳩をいとしがり　八尾市　高橋　夕花
黄昏をいつまで拒む白いバラ
紫のそれより濃ゆき言葉かな　神戸市　小浜　牧人
完敗の空は美事な夕焼けだ
演技かも知れぬ涙がすぐ乾き　八尾市　香川　酔々
風来坊鳥居に石を乗せて去る
台風の目になりたがるのも女　島根県　堀江　芳子
ここからは男親には手が出せぬ
なにげなく父の肩揉む子を見つめ　柏原市　小谷　葉子
お人好しの夫婦に謎をかけようか
月は斜めに別れる女の道照らす　今治市　古野　伶人
無駄使いさせねば女働かず
使い捨てられた老後で詩を作り　大阪市　正本　水客
スリッパで歩いて観光寺院めく
うるし塗る手許に西陽とどかない　鳥取県　鈴木村諷子
八十点くらいな人になりとうて
役人の腕かお金の力かナ　岡山県　白岩　文衛
えにしとは何腐葉土ふむ音に
きつつきよお前は山の鍵っ子か　大阪市　小出　智子
台風が来そうで本を買いにゆく
中年と云う分別に哭くだろう　大阪市　宮尾あいき
子の石は沖へ飛び私のはぼとんと消えた
セドリックで墓参私も偉くなったもの　今治市　月原　宵明
誤字脱字恋知りそめしタイピスト
ケロイドの怨嗟よ八月十五日　香川県　三井　酔夢
蟬しぐれ玉音きいた耳がある
バラックで飢えた話は戯画なのか　島根県　堀江　正朗
子のように見られて妻の目に拗ねる
声かけて追い越してゆく風の顔　倉敷市　水粉　千翁
夕顔の白きを炎えて灯のもるる
誰に咲く宵待草の褪せぬ間に　和歌山市　若宮　武雄
野良猫に似つかぬ瞳生れてる
喪服さえ女盛りを包めない　京都市　松川　杜的
カメラアイ屋根の流れを見逃がさず
アチャコはんが笑ろてはるがな笑魂譜　高槻市　山田　季贊
さりげなく聞ける話は聞いておく
掃除機が今日不機嫌な音を立て　鳥取市　河村　日満
当落のくじにジャンケンポンの石
焦点はいずこピカソの画の微笑　東大阪市　竹中　綾女
女の汗北山杉の艶となる
台風情報知らされすぎて尚不安　貝塚市　行天　千代
嫁いだ娘幸福そうな肌の艶

孫生れる瞬間思わず掌を合わせ　鳥取市　勝山　紫宏

ジーパンをはいて蛹が皮を脱ぎ　八尾市　大路　美幸

底意あるユダの花束でも匂う　今治市　原田　一風

或る日ふと俺の仮面を問う鏡　富田林市　岩田　美代

愁怨か流し灯篭の傾ける　今治市　真山　国彦

小走りで来て手を合わす法善寺　堺市　高橋千万子

貧乏し蜘蛛もどこかへ越す構え　羽曳野市　麻野　幽玄

病む胸に過去のロマンのきれいすぎ　名古屋市　吉田　水車

せみせみよお前の肺は一と夏か　備前市　武内　雅堂

石になる女の肌よ水中花　八戸市　小泉　紫峰

憎めない男の詭弁ビール酌ぐ　島根県　安達　潮音

老いの夢病めば果敢なく野望めく　堺市　河股　緑水

虫籠を提げて弟らしくいる　岡山県　竹内　翁童

冷房のきいた講習志願する　滋賀県　柚木　踏草

失敗へ他人の痛み解る人　和歌山市　西山　幸

ファッションショー能面の顔歩いてる　和歌山市　小川佐知子

愛しさは北海道より小さき甥　大田市　藤田軒太楼

コンベアの動き見詰める無感動　新見市　吉田　落猿

ダムが出来流灯の火も消え失せる　倉吉市　奥谷　弘朗

甲子園のんびり見てる盆休み　尼崎市　黒川　紫香

杖ついて同窓会でいたわられ　西宮市　藤村　〆女

編笠のうなじが白い踊りの輪　守口市　羽原　静歩

平凡はいいな尺取虫になる　名古屋市　大林曲ん手

読み過ぎて理屈の多い本の虫　大阪市　新川　貞祐

老残の散歩野良犬にまで追い越され　岡山県　出原　敬一

同情のどこかを別の風が抜け　和歌山市　桑原　道夫

地下鉄の闇が安らぐ男にて　倉敷市　高山みどり

東雲が咲いてあなたを今朝しきり　大阪市　江城　修史

ふと洩らす一言隙のない男　和歌山市　澤山　福水

土ぐもの時代の土器を掘りおこし　小松市　馬場　魚山

たかぶっているのか唇濃く塗り　大阪市　西出　一栄

もうあかんあかんと盃伏せもせで　呉市　槇田　英詩

愛ならず女ごころは謎のまま　伊丹市　小川静観堂

なにひとつ不自由のない米寿かな　倉敷市　能登原白水

恵二朗師渡米

師の土産枯れ玄関に花が咲く　堺市　伏見　茂美

言い負けて背中合わせのうちわ風　松江市　梅本登美也

偶び逢う月の真下の草の丈　東大阪市　竹中　肖二

座布団を手頃に折ってする昼寝　松江市　岡崎　祥月

どれいとなって五尺八寸の脂汗　出雲市　高見　鐘堂

悩むのが人生歩巾ふみしめて　今治市　伊藤　一郎

小口にも同じお辞儀をして帰り　橋本市　森脇　善彦

笹舟にロマンのゆくえ追う二人　和歌山市　松原　寿子

別れ来てすぐにペン先はずむ夜

（本社宛へ送稿されると、本社から薫風氏へ転送することになります。ムダな時間を省く意味からも規定はお守りください）

投句先　〒560　豊中市中桜塚3丁目13—15。**橘高薫風宛**—（一人三句）

課題吟について

阪上十止庵

世にいう秘伝書、トラの巻などと称する類いのものの多くは、実に他愛のないことどもを、まことしやかな文字によって綴られたものである。

野良犬十止庵の狙うポイントも、当然のことながら、ご他聞に洩れないが、そのひとつに——。

課題吟は何といっても課題が主人公であるから、その意味をあらゆる角度から検討し、あくまでその意味に忠実な拡大解釈を行うとともに、それによって生れる句想から、過去の類句類想を整理し、残った句想を素材に、自分の思想を盛り込み十七文字に纏め上げることにしている。

文字にすると、何やら難しいことのようであるが、いつも、皆さんが作句の場合にとっておられる態度で、別にどうということではない。

ただ私は、課題の検討のために、大百科や大言海は別として、漢和字典、広辞苑、言林現代新語辞典などは、疑問が生じると自動的に左手が伸びる棚の上に置いてある。私は辞書類を繰る面倒さをいとわないことにしている。

いまひとつに——。

選者も課題と同様、検討することにしている。曰、その柳歴、識見、傾向等々である。

課題とは選者が、作句者に対する質問であり、その質問に対して作句者は、十七文字をもって応答する。

この場合、絶体的な権限を有つ選者の、柳歴、識見、傾向等が、その選句の上にどのように反映するかは、いうまでもなかろう。

私は、選者の能力を、その柳論や作品によって判断し、それぞれに適応しい句を投じることにしている。決して、抜いて下さいというような卑屈な〝当て込み〟屋になるのではない、どうでも選者が抜かねばならぬような句を作るのだ。愚かな思い上りともとれようが、その位の自尊心は持つべきだと思う。

要するに、私は、課題とともに選者をも研究することを、金科玉条としている。にも拘らず、あまり抜けず、全没が多いのは、どこかにひずみがあるのだろうが、当分は、この方針を変更しようとは思わぬ。

最後に、少し余談めくが……

兼題の選者を、当日の出句締切間際か、締切後に発表する句会がある。別に私自身の狙うポイントを外されたからいう訳ではないが、非常識極まる行為だと思う。十名内外の出席者しかない小集なら、事情もわからぬではないが、少くとも二十名を超す出席者があるような場合はどうであろうか。

席題は別として、何日も前から練りに練った兼題句を、即製の選者に選ばせるなど、どう考えても異常ではないだろうか。選考は課題の常識的な理解よりも遙かに奥深い理解が要求される。当然のことである。

しかし、現実には、出席する句会の大部分で、締切間際に、選者をこっちで勝手にきめたから、よろしくたのむぜ、という脅迫めいた有無をいわさぬ主催側の声をきく、時折は、私のような者にも御指名があるのでウンザリする。それがイヤさになるべく目立たぬようにしているのだが——。

句会はいったい誰のためにあるのか、という原点に戻って、主催者は下らぬ理屈を並べるより、句会を、出句者と選者の手に返すべきではないか。

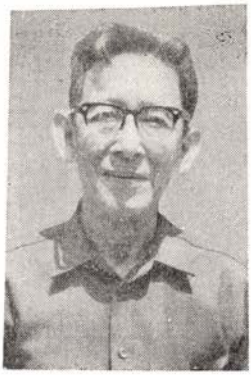
よい句を、作り選ばせるために——

とき　10月26日（日）午後一時開演
ところ　大阪市東区上町台2番地
大阪婦人会館3階ホール

第八回　奇術発表会
（ご来場歓迎）

但し上本町二丁目交叉点北へ一〇〇米東側

主催　関西奇術教室



悼む！ 田中万作君

野村太茂津

万作さんが亡くなった。八月のわかやま句会は日曜日の二十四日午後四時頃熱況裡におわった。川村好郎講師以下、さよならを交わして席を立つ、丁度万作さんと欠席者の消息などを話し、冗談を云い合い元気に訣れた。

私達は後始末や編集や、当日の句について話し合ったりして満ち足りた心で帰宅した。

私は少し疲れていた。しかし明るく元気に帰っていった柳友達のことで大きな安堵感だけ残っていた。

翌朝の電話の耳に飛び込んで来た吉野冨江さんの言葉「太茂ッつァん！万作が死んだ」力のない元気のない声だった。

「よしッわかった、直ぐ行く！」……室に入ってみると、身内の人々が右往左往、誰がどうやらウロウロわからない状況、無論冨江さんは、立ったり座ったり、話しても支離滅裂、呆然自失さっぱりわからず、ただ判断出来たことは「今朝寝床へ起こしにいったら手が冷たく、まだ腹は温もりがあった」と云うことだけ。

万作さんの死顔というよりも、寝姿に見える顔に訣れの言葉は胸の中で、言葉にはならず、じっと見つめるだけである。こんな往生が、こんな別れがあるだろうか。

葵水君とは、生前、人生について、死について話し合い意見を交わしたことはあったが、万作さんとは私の人生観を私が一方的に話したことは唯一回だけで、彼の胸の裡は遂に聞けなかった。これからボチボチ訊きたいと考えていた矢先であった。

特殊な変わった生き方をした彼の心の奥底を訊いて、話し合いたいと思いながら、チャンスもなく、とうとう此処まで来てしまった。

彼の遺した佳句の数々、折に触れて心の詩を表現した数々の中から、その一端でも掴みとり、推察する以外に方法がないのだと思うとほんとに残念であるが又一面、その余情を彼の句によって噛みしめる楽しみも、チョッピり湧いてくる不遜な、複雑な気持ちも匿せないのである。

そして残念なことに、川柳わかやまの名吟家の一人を失ったこと……かえすがえすも。

彼は恋に生きた人である。複雑な、煩わしい環境の生活から一ッときでも逃げ出し、何時でも、どんな時でも、朝起きて、寝るまで、或は寝てる間も心から離れない「悩み」を唯一つ抱いていた人だと云える。そしてその悩みがあればこそ生きて来られたのであり、死の直前まで、素知らぬ顔で生きていたのである。私の見る限りでは、その悩みに対する反発というか、抵抗のために虚勢とも見える程に気位の高い姿勢を、他人に対して張り通して来たが、心の奥底では刀折れ矢尽きたのではないか、とも思われる。その点を推測して、万作さんに同情と哀感を禁じ得ない。

死顔を拝見しても、「太茂津よ何を考えとるのか」と云うような静かな安楽なデスマスクの唇だった。一面彼の往生を羨しく思う。

今頃は、あの雲の峰で葵水と会っていることだろう。川柳わかやまの最新のニュースを聞かせていることだろうと思うと、「ほほえましい悲しみ」と表現する以外に私の拙い頭では言葉が浮ばない。

どうぞ、道中無事に葵水のところへ行きついてくれるよう祈るばかりである。私はまだまだすることが山ほどある、万作さんよ、葵水によろしくたのみます。さよなら。

（本名政夫・明治45年2月8日生）

南無万作色即是空会者常離　太茂津

里親

藤田軒太楼選

里親は我子の方をよく叱り　重人
里親のつもりが養子に貰い受け　度
里親へ名乗りを上げた子供好き　与史
巣立した子が里親へ初便り　紫宏
一日の里親なれど愛そそぎ　正則
里親にこんなに成長したと書く　落猿
里親がおずおずテレビのご対面　一郎
睦まじい親子里親とは見えず　道子
里親は日毎損得から離れ　伶人
里親の愛情慕う綴り方　福水
氏素性里親だけが知る秘密　漫柳
逆境の小さい命の親となり　近江
里親を知るや知らずやよく眠り　暁明
里親になって夫婦に張が出来　七面山
里親と再会出来た手の温み　季賛
薄倖の孤児へ里親灯をともし　洛酔
嫁してまで里親慕う子の心　祥月
里親へまた舞戻る愛を知り　芳仙
里親の母のくせまで似て育ち　洋々
他人の子育てた誇りだけの親　弘朗
人の世の恥部を里親抱いてやり　バット
里親の恩を忘れぬ立志伝　伊津志
里親の顔色を読むつぶらな瞳　本蔭棒
里親になって亡き児の齢数え　潮音
里親を拝む気持の親となり　千翁
里親と思えぬ愛の平手打ち　悠泉
里親に云われたくない気の配り　思月
里親に辛い別れの日が迫り　代仕男
里親の夢を里子は受付けず　翁童
里親を泣かせて別離の日の坊や　右近
里親を招いて今日の高島田　木魚
里親に馴染んだとこを見て帰り　国彦
里親の義理とは別に愛も湧き　暁風
里親に越えてはならぬ垣がある　肖二
実家より里親解りが余程よし　春日
肩揚げの子が里親の胸に棲み　宵明
佳
無心純心里親の乳をのみ　信二
里親の家督を僕が継ぐ冥利　里風
打明ける機会を里親もちつづけ　魚山
里親の悲しい過去を聞く夜長　本蔭棒
里親がひっそり迎える無人駅　登美也
人
寝かす子に里親うたう唄がない　道夫
地
里親に血よりも濃ゆい愛が湧き　どんたく
天
里親として夕焼けへ手をつなぎ　可住
軸
里親の無慾人柄偲ばれる

新刊

辻白渓子選

公害にちよっぴりふれた新刊書　可住
ベストセラー買う気を誘う新刊書　暁明
発禁を見越し新刊直ぐに買い　一風
読ませたい人の為め買う新刊書　国彦
新刊の魅力カバーの良い図案　バット
特ダネの記事新刊がよく売れる　季賛
新刊にもてる智識をみなさらけ　七面山
新刊を本屋いちおう目を通し　本蔭棒
新刊書みな売れそうな題がつき　紘
新刊も評判ほどにない中味　暁風
ベストセラー夢見て新刊デビューする　どんたく
新刊書知って老人見直され　近江
献立へ妻新刊の智恵を借り　カズエ
ベストセラーレジに積まれた新刊書　道夫
書架の見栄まだ新刊のままにあり　宵明
積んで置くだけの新刊買いあさり　思月
新刊へ賭ける徹夜の灯が消えず　悠泉

第18回豊中文化祭市民川柳大会

主催　豊中川柳会
後援　豊中市立中央公民館
日時　昭和50年10月26日・正午開会
場所　豊中市立蛍池公民館（阪急蛍池駅下車南へ百米）
講演　「うちとけて」　堀口塊人
題　「恩」　加賀破竹選
「うぬぼれ」　神谷凡九郎選
「わが家」　籔内千代子選
「妻」　平井与三郎選
「錯覚」　橋本言也選
「軽輩」　戸田古方選

新刊書ずらりならんで二浪の子　カズエ
新刊書拾い読みしてそれっきり　竹馬
新刊のビラ立ち読みに邪魔がられ　千翁
手をつけぬ新刊もあり古本屋　宵明
新刊へたのまれ名士お世辞書き　どんたく
新刊を枕にぜいたくな昼寝　重人
自費出版とんだところがお呼びです　みどり
自費出版非売そんな新刊書　凡九郎
逸話哀話秘めて新刊売り出され　代仕男
新刊は我慢文庫で出るを待ち　一風
返送の包みの山は新刊書　伶人
新刊の活字売れ行きまで知らず　豊生
ダンディの小脇にはさんだ新刊書　七面山
癌に効く前評判の新刊書　代仕男
新刊の育児書姑から贈られる　のぼる

佳

文部省推薦新刊は売れ残り　度
新刊へ女優一言書かされる　木魚
分身となり新刊は生き続け　白水
闘病のベッド新刊回し読み　芳仙
教祖様が書いた新刊ベストセラー　保夫

人

新刊を同志で祝う車椅子　白水

地

新刊の著者は悲しい自序を書く　のぼる

天

新刊がぼろぼろ医師の待合所　綾女

軸

視聴率あがり新刊出すドラマ　昭治

利息

木山遠二選

忘れてた貯金の利子が育ってる　道子
人の為つくして恩を云う利息　魚山
人生の利息施設で息をする　みどり
まる優に小さな利息を助けられ　肖二
借り入れの利子で追われるマイホーム　代仕男
借りて貸す利ざや焦げつくとも知らず　思月
利息など云うて居れない金を借り　翁童
金ぐりは利息のことまで考えず　暁風
本家から利息にふれず貸してくれ　重人
つつましく利息頼りに生きる道　悠泉
清貧へ情容赦のない利息　道夫
なけなしの利息で買った貯金箱　右近
あずけては安く借りては高い利子　香珠夫
血と汗で貯めた利息で食べられず　福水
資金ぐり利息ばかりで火の車　どんたく
余生まだローンの利息追って来る　バット
投げ売りで払うて利息から逃れ　一郎
老妻の指輪利息の金で買い　一風
無担保で借りた利息の恐ろしさ　落猿
公定歩合上下わたしに用が無い　正則
利息でも入ると出るとは大ちがい　軒太楼
癌だとは知りつつ払う高利息　祥月
月九歩の利に利がついた金の嵩　カズエ
利子つけて返すと息子借りに来る　平賀紅寿

「人柄」　鵜飼蟻朗選
「余白」　（雅号いろは順）

席題　二題（各題二句）当日出句
会費　五百円（投句も五百円〈大会句集代〉）
賞　秀句多数に呈賞
投句　10月20日締切ハガキ型用紙
〒560　豊中市蛍池中町3丁目9番20号
豊中市立蛍池公民館川柳大会係宛

利息まで付けて貸金子が返し　豊生
顔なじみ質屋利息をまけてやり　春日
停年後利息をあてにする暮し　晃之
利息だけで食って行くにはちと足らず　七面山
利息では食えずさりとて仕事なし　暁明
退職金利息で食えず靴を穿く　金太郎
金借りるやはり利息が先になり　季賛
友情とは別に利息はちゃんと取り　洋々

佳

友情が利息も取らず貸してくれ　綾女
年金と利息で食べて趣味に生き　国彦
倖せは利息で買える孫の物　本蔭棒
借る時の利息は知れたものに見え　可住
利まわりを考えている貯めている　千翁

人

借りたより利息の方が上廻り　里風

地

今月も九分の利息だけは入れ　たもつ

天

金魚鉢の金魚のように利子で生き　宵明

初歩教室

題 ―「和」―

本田恵二朗

先天的に持っているのだが、自分でも気づかないでいる良き特性が偶然なチャンスに出会って、こぼれ出して生れた句は素晴しい。読者に大なり小なり感動を与えさえする。

虚飾と迎合の意誠で、後天的に作り上げた句は、それも面白いのだが、感動を与えるほどのものにはなり得ない。

佳きセンスと個性と教養とが基礎となつて生れた句は香り高いものがある。

そんな句を生みたいものだと、日夜乞い願う私だが、なかなか生み出し得ない。しからばどうすればよいのだろうかと考える。川柳の根に土を盛り、肥料を絶えることなく施さねばならぬと思う。その作業がなくては佳句は生み出せない。作意ではない作業である。作業即ち努力である。

温和な夫たまにはげしい喧嘩したい　日日子
（温和な夫たまには喧嘩もしてみたい）
多才な女和裁だけは苦手よと　同
（和裁だけは苦手なのよと多才なひと）

一日をことなく過ぎて夕餉の和　サヨ
（今日もことなく送った夕餉の和）
孫抱いて一徹おやじの和解　同
（もみじの手一徹爺ちゃん和ませる）
輪禍また柔和な地蔵を悲しませ　無人
足らぬとこ足して夫婦の和を保ち　同
（足らぬとこ足し合い夫婦の和を保ち）
夕飯に小びんで和む下戸夫婦　同
（夕餉の膳小びんで和む下戸夫婦）
大の字に寝ころび平和かみしめる　洛酔
京訛り和服の似合う女に逢い　同
（鐘の音へ和服が似合う京訛り）
へそ曲り一匹職場が白ける　昭治
（臍曲り平和な職場へ水を差す）
お金では買えぬ人の和尊けれ　同
（人の和は金で買えないものと知り）
諍も子のくさびで和解し　清
（口論の顔和ませた子の寝顔）
里帰り母の見立てし和服着る　同
（里帰り姑が見立てた和服着る）
あす嫁く娘に贈る和の一字　天人
（嫁く娘に贈る和の字に心込め）
孫が来て夕餉の和む久し振り　同
（久方の孫へ夕餉の座が和む）
和解後のコーヒー砂糖もたっぷりと　幸
（和解したコーヒー砂糖を入れ添える）
回診医のユーモア病室和やかに　同
（回診のユーモア病間を和ませる）
逆境を生き抜いて来て平和の日　同
（逆境に勝ち抜き平和な日に出会い）
和を乱すもとに金銭からんでる　静泉
（和を乱すやっぱり銭の音がする）
わが家の平和条約キッス一つで済み　同
（和解術キッス一つで事が足り）
和すること一足す一を三にし　頼次
（和は楽し一足す一を三にする）
台風が一過こおろぎ月に和し　同
（台風一過虫のコーラス月に和す）
お近所の泣いてわめいて遊びづれ　静江
（遊び連れ泣いてわめいて仲が良い）
しあわせな朝餉に香るしじみ汁　同
（和やかな朝餉に香るしじみ汁）
バランスに縋っている夫婦の平和　紘
（軽妙なバランス夫婦の和を支え）
和服がいいネ父さん値が張るよ　同
（和服がいいネでは買って頂戴よ）
和をもって一家円満良い家庭　秀村
（茶の間の灯和がしみこんだ彩である）
和解する糸口反省から見つけ　道子
一人ずつ辛抱してる平和です　同
（それぞれが辛抱してるから平和）
一言を控えて人の和を保ち　同
（一と言をぐっと呑み込み和を保つ）
エリートで頭がきれて家庭不和　信二
（エリートコース家庭の方は不和らしい）
和解するチャンス踊りへ引き入れる　紀美代
その実は柔和な親父と知っており　同
（その実は柔和な父よと娘がかばう）
呉越和し笑って握手して別れ　藤持
和やかに会話味出す夕餉時　同
（和やかなお喋り夕餉の膳はずむ）
和やかさ上司不在という会議　保夫

筋書の如く労使の和解劇　同
（脚本の通りに労使の和解劇）
胸の中互に吐き出し和解をし　つね
（胸の中吐き出しおうて和解する）
世の平和祈って原爆三十年　同
（世界平和祈る原爆三十年）
家庭平和の為の苦労は人知れず　繁子
（人知れぬ苦労で保つ家庭の和）
いつからかかかあ天下もまた平和なり　ますえ
（いつからか妻が天下をとり平和）
つぎつぎと欠伸がうつる日の平和　度
（順番に欠伸がうつっている平和）
床の間で足がしびれてきた和室　同
（和室は苦手よとミニの膝小僧）
和を説いて不和を説いて笑ってる　静観堂
退院のうれしさ和服で紅をつけ　妙子
喪服セットだけが和服の新世帯　貞祐
和を以て貴しとする負けておく　同
老夫婦手を取り合える距離保ち　紫宏
新社員みんなで手を取り足を取り　同
失敗をなじらぬ笑顔持ちおうて　鎮彦
わが家の平和へ扇風機が廻る　同
大地との和合一と坪へ鍬を振る　翁童
社是の和がくずれそめてる三代目　同
早々の和解一物秘めている　露杖
和解酒過ぎても一度もめ直し　同
和服着ることもなし男ひとり生き　正則
和服着て財布の入れ場どこにしょう　同
和解せぬまま転勤を見送られ　史子
ぬるま湯に情熱とけている平和　同
ばら色の和音奏でる新世帯　大成
不覚にも和製の英語にかつがれる　同
人の和がならず合併の効果なく　多平
目的は一つの筈だが和解せず　同
機構ちょっぴりいじった位で和はならず　同
男性として見直した娘の和服　利美
年金の足らず和裁でやっと埋め　同
両親の不和に芽生える子の非行　同
目隠しをされて平和を叫ばされ　道夫
和を保つ阿呆になるのは母の役　同
方便の嘘を言い過ぎ和が崩れ　同
地球儀のここだけ平和を知らぬ国　慶彦
和やかに話して肚を探り合い　同
亡き父を語る和尚もいけるロ　同
和楽こそ極楽なれや風さやか　つた
思いきや祖母の和歌なり古文庫　同
なつかしい和歌を見つけた古文庫　同
柔和な目の奥に秘めてる青い炎　洋子
原爆忌平和の願い新たにし　同
苦難越え悟りの境地にある平和　同

☆

題―糸―十月二十日締切（十二月号発表）
宛先　岡山県倉敷市一―九―三四　〒七一一　本田恵二朗

堺まつり堺市文化祭協賛

第29回　堺市民川柳の会

日時　10月19日・正午開場・締切1時
会場　紅谷庵（べにやん）堺市中三国ケ丘二丁一の三七（電0722・33・4277）南海高野線堺東駅東へ百米・三国ケ丘高校前―駐車場所有
挨拶　堺市文連協会長　高木幸太郎氏
講演　番傘川柳本社　礒野いさむ氏
兼題と選者（アイウエオ順）
「先頭・上野山東照」―「南蛮・奥田白虎」―「時代・片岡つとむ」―「肌・菊沢小松園」―「遺産・橘高薫風」―「まぼろし・板根寛哉」―「波・定金冬二」―「柳・高橋操子」
出句　各題三句（席題なし）出席者に限る
会費　五百円（記念品・作品集・呈）
賞　市長賞ほか多数
連絡先　堺市櫛屋町東一丁二の二（梶川方）堺番傘川柳会事務所
主催　堺市文連協会・堺川柳作家協会

第二百九十一回（五十年度第九回）

大萬川柳「なぞ」入選発表

選者　川村好郎
投句総数　四百二十八句
入選　六十七句

なぞなぞに茶の間明るい笑い声　大阪　柳宏子
肚のなぞよそに米ソのドッキング　堺　ひろ子
なぞめいた生活悪女にされている　貝塚　つき子
なぞめいたひと言一夜を眠らせず　藤井寺　吸江
謎解いた瞬間女の顔歪む　大阪　小松園
なぞかけるばかりで好きがまだ云えず　宝塚　静馬
謎解けぬ夫婦の愛が冷えてゆく　神戸　牧人
献金のなぞつついてもつついても　鳥取　日満
出生のなぞ父空席の戸籍欄　和泉　洛酔
なぞめいた男女が穿いた宿の下駄　富田林　維久子
なぞとけぬふりして彼のそばを抜け　鳥取　天人
法則の謎へ毛虫として生れ

合鍵を渡し男へなぞかける　大阪　万里
黒い霧なぞのまんまで消えてゆき　大阪　好一
姿消した謎の女が鍵を持つ　大阪　文秋
敗北の一瞬あの日のなぞが解け　倉敷　梁水
外交辞令互いになぞが読みとれず　松江　晃男
なぞとけぬまま妥協する箸をとる　和歌山　佐知子
亡父の遺書一点なぞとして残り　西宮　多久志
なぞめいた微笑がこわい酌を受け　大阪　柳信
戦争のなぞ終ってから明かし　和歌山　与史
なぞのまま田中金脈幕となり　大阪　蘭
かけられた謎へ男の血がたぎり　兵庫　近江

なぞかけるように内気なプロポーズ　岡山　翁童
栄転と左遷社内の謎とされ　笠岡　忠三
このなぞが解けぬお人のじれったさ　松原　サヨ
すんなりと通る裏にはなぞを秘め　堺　藤持
相槌は打ったがなぞのある話　倉敷　里風
耶馬台国沈めてなぞが又ひとつ　橋本　義彦
なぞかけず好きなら好きと言いなはれ　奈良　本蔭棒
美しいなぞは解けないままでよし　倉敷　白水
なんで燃えたのやら私なりの謎
レモンティ女は謎に触れさせず　富田林　美代
女一人現われ事件の謎が増え
謎めいた女へダイヤよく光り　和歌山　道夫
善人の世になぞが多すぎる
事なかれ主義でいて謎に蓋　八尾　弥生
謎を解くカギを握ったままで逝き
ノラリクラリとなぞめく過去にふれさせず　鳥取　洋々
なぞでよし蓼食う虫もいて夫婦
なぞかけて言いたいことを溜めている　堺　緑水

なぞを閉じ込め高松塚静か
要人の動きになぞがつきまとい　大阪　柳志
なぞめいた由来で観光客を釣り
なぞかけて出方待っているゆとり　大田　軒太楼
月面に降りたが更になぞがふえ
かくされた秘密死なれてなぞの儘　鳥取　紫宏
伝説のなぞへ科学のメスを入れ
子にすればなぞ母さんのおまじない　尼崎　利美
なぞかけてみたが空しく恋は消え
事件のなぞ握る女が闇に消え
なぞを解く手がかりたぐれば糸が切れ　東大阪　美子
なぞめいた女の指にからむ数珠
なぞめいた日記に愛が住んでいる
生きてゆくなぞを夫婦の手でほぐし　富田林　花梢
今ここに生きているさえ謎である
月のなぞ解けて童話が枯れている
いくつかのなぞ解けぬまま共白髪　和歌山　武雄
うぬぼれの男に女謎である
現代子に神代がなぞの日本史
医師として解かねばならぬ癌のなぞ　呉　英詩

佳句

古代史のなぞを墳輪の瞳が笑い　堺　ひろ子

ピンセットにつつかれている虫の　富田林　花梢
なぞ
謎のまわりに有棘鉄線張る女　堺　天笑
ホステスの暮しのなぞは触れさせず　大阪　柳信
モナリザの微笑を女みんな持ち　熊本　芳仙
人ノ句
人生の謎に雲が走るだけ　富田林　美代
地ノ句
謎にしておきたく石仏語らない　兵庫　可住
天ノ句

精一杯生きる　明日は謎だから　八尾　美幸
選者　吟
謎がなぜ生むわが影踏むごとく

昭和五十年度ベストテン（八月現在）

一	**美幸**	二〇、五　八尾
二	**花梢**	一九、五　富田林
三	**可住**	一八、〇　兵庫
四	**一二三**	一六、五　堺
五	**好一**	一五、〇　大阪
六	**弥生**	一三、五　八尾
七	**多久志**	一三、五　西宮
八	**美子**	一三、五　東大阪
九	**利美**	一三、〇　尼崎
一〇	**牧人**	一三、〇　神戸
一一	緑水	一二、五　堺
一二	つき子	一二、五　貝塚
一三	小路	一二、五　寝屋川
一四	柳志	一二、〇　大阪
一五	梁水	一二、〇　倉敷
一六	吸江	一二、〇　藤井寺
一七	翁童	一一、五　岡山
一八	柳宏子	一一、五　大阪
一九	洋々	一一、〇　鳥取
二〇	文秋	一〇、〇　大阪
二一	あいき	一〇、〇　大阪
二二	天笑	九、五　堺
二三	美代	九、〇　富田林
二四	宵明	九、〇　今治

以下略

昭和五十年度第十一回
「靴ベラ」　五句以内
締切　十月二十五日

昭和五十年度最終回
「拍手」　五句以内
締切　十一月二十五日

投句先
〒593　堺市堀上緑町一ノ三ノ七
藤井一二三方
大萬川柳係

（ご投句はかならず右へお送りください。）
―編集部

第22回八尾市文化祭
市民川柳大会

時　**10月12日**（日）正午開催
所　八尾市商工会議所　3階大ホール
近鉄（大阪線）八尾駅下車南東三百米八尾市役所前

開会の辞　中山凡路
柳話　「河内と八尾」深尾吉則氏
兼題及び選者（アイウエオ順）
「籠」……久保田以兆選
「熟」……三条東洋樹選
「色」……時実新子選
「灯」……西尾栞選
「私」……堀豊次選
「皿」……室田千尋選

閉会の辞　古川鶴声
◎席題二題　各3句吐締切午後1時30分

投句先〒581（八尾局私書箱第9号）
八尾市清水町1丁目1―6八尾市立公民館内。**（投句締切10月2日受付分まで）**

日川協コーナー

▼9月13日（土）午後1時から2時まで常任理事会開催。（日川協東京常任理事会）
▼会場は竜宝寺川柳会館（台東区蔵前四の三六の七）―国電御徒町・地下鉄上野広小路又は仲御徒町より都バス三筋二丁目下車。交差点の葬儀社裏。
▼本社から中島生々庵主幹が出席。

夢が広がるショッピング
近鉄がお届けします

アベノ近鉄●TEL 621-1231

上本町近鉄●TEL 779-1231

奈良近鉄●TEL 33-1111
アベノ
上本町
奈良
近鉄

柳界展望

（原稿締切毎月末）

▼50年度の路郎賞と川柳塔賞が10月5日の川柳塔社句会で発表された。路郎賞は「悔のない汗　千金の夢追わず—林瑞枝」川柳塔賞は「末法の世の新聞をたたみけり—安藤寿美子」に決定当日は谷町の中小企業文化会館で本社の同人総会と二賞の授賞式があった。

▼生々庵主幹は9月13日に東京竜宝寺川柳会館で開かれる「日川協東京常任理事会」に出席。すぐその足で9月14日の西日本川柳大会へ出席という相変らずの大多忙である。

▼川柳さっぽろ9月号で、昭和四九年度北海道川柳年度賞と連盟賞を発表。年度賞「頂天を引きずりおろす手が無数—ほか四篇—大橋政良」連盟賞。「働く手指輪を邪魔なものにする—ほか四篇—佐藤正」ほか二名

▼木村喜見城句碑建立記念—句集「いしぶみ」が富山県魚津市上村木三九七五の一（魚津市立図書館内）から発行。「何もかも捨てて枯野の柿の紅—喜見城」（非売品）

▼「対流〈一行詩研究〉」5号（季刊・九月一日発行）が〒170東京都豊島区北大塚1丁目33の4森林書房から発行。〝川柳人は眠たげである—山村祐〟や〝句をめぐる史的断想—津久井理一〟の好読物や柳人・俳人の佳句が光る。定価三百円（〒三五円）

▼各地の文化祭川柳大会へ本社から多数選者として出席。本誌参照。

▼せんりゅう灰皿（同人三井酔夢参加）七月号は「私の中の神と仏—時実新子」と「川柳性を弄ぶ川柳人—小野蒙古風」は好読物。

▼川柳「ひろしま」九月号は、被爆30周年・第一九回広島平和祭川柳大会号。

▼備北新聞に川柳塔8月号が紹介された。「喜寿愉しみ緑の夢は舞い狂い—中島生々庵「素人の恐さ知らずが儲けとり—大坂形水」など

▼島根県芸術文化祭協賛「第五回島根県川柳大会号」が島根県川柳協会から発行。川村好郎氏の講演「発見されて行く生活」の要旨など満載。

▽同人の動向△

▼八木摩天郎氏（堺市）から—わが町の昭和史「お隣さん」のサンケイ新聞から取材に来られ7月29日に掲載された。—堺市湊連合自治会婦人部主催の〝納涼の集い〟に「千利休と秀吉」の話をされ好評だった。

▼小西無鬼氏（兵庫県）から—県立文化会館OB大学の趣味講座「川柳」の講師を本年も委嘱され、一人でも多く川柳塔の読者をふやしたいと。

▼橋高薫風氏（豊中市）は八月中旬、東京から石丸弥平氏が来阪、京都へ共に行かれたが、途中で胃が痛みだし、弥平氏にすまなかったと。

▼浜野奇童氏（岡山県）から—河川愛護と銘うっての筏流しをしました。バイクで岡山まで陸運局をつとめました。

▼原田一風氏（今治市）は生長の家の研修会で長崎へ行き、その帰途唐津で新岡回天子氏に会い、ニオカ印刷の立派さに驚かれたとのこと。

▼今西章雅遺稿川柳集「天ぷら」が50年7月14日（七・七忌）に今西哲子さん（未亡人）はじめ遺族の方々の手によって発行された。全国柳誌へ発表した中から約二千句が収録されている。あとがきによると、病気をしたことのない氏が救急車で病院へはこばれ僅か四十五分で急逝されたそうである。発行所は大阪市西成区山王二丁目十二番十八号、今西哲子（非売品）

▼河村日満氏（鳥取市）から―鳥取国鉄川柳会で万的さんに会いました。画も句も上手で句会をひとり占めにされました。

▼古川鶴声氏（八尾市）から―敗戦の思い出となる後遺症に悩まされ今川病院で三週間（九月一日まで）入院しましたが、このほど退院したもののまだ通院です

▼山川阿茶さん（大阪市）は八月二十一日、生駒の葭乃先生をたずねられ「先生はお元気でした」と。

▼堀江芳子さん（島根県）から―正朗は、傷痍軍人会盲人会、鍼灸会と夏は多忙です。私は徐々に快方へ向つております。

▼山本窓花さん（宿毛市）と瀬田美知さん（宿毛市）は台風5号のため、商品などが水につかり屋根まで飛ばされたとのこと。一日も早い復興を祈ります。

▼舟本与根一氏（松江市）は8月21日自宅前の県道で追突されムチウチ症で目下通院加療中とのこと。

▼久米奈良子さんの前号毎日書道展の「入賞」を「入選」と訂正。

▼浜田久米雄氏（岡山県）から―第19回国鉄川柳人連盟鳥取大会では多くの川柳塔社同人に会いました。9月14日の西日本川柳大会にも出席。

▼山内静水氏（竹原市）から―お蔭様で大会は盛会でした。本社のご支援感謝しています。神戸で30年ぶりにラバウル時代の戦友たちに会います。

▼前号二賞候補中間発表の若本多久志氏選の「忍従の土間ほの暗き文化財」は出原敬一氏作と訂正。

▼田中万作氏（和歌山市）は八月二十五日急逝（本誌参照）二十六日午後二時から市内の専光寺で告別式。柳人多数が参列。謹悼。

▼不二田一三夫氏は8月20日付電波新聞（「漫才綺談」を執筆。ボヤキの人生幸朗師とは小学校時代の同窓で、数十年後片や漫才作家という実話。これは「川柳寄席」に収録される。なお同紙の薫風選「電波川柳」は好調。〒530大阪市北区中之島三の三朝日新聞ビル電波新聞大阪本社宛（川柳は水・土の各曜日に発表）

▽旅　信△

▼若本多久志氏（西宮市）から―マッキンレ―ああ悠久の大自然―多久志。日本の四倍もある土地で観光は小型飛行機しかない有様この氷河を抱いた山々を見て人間のチッポケな事を痛感しましたと。

▼本多柳志氏（大阪市）から―盆休みを利用して家庭サービスで中宮温泉へ来ています。―猿酒に酔いしかおなり山は秋―柳志。

▼大路美幸氏（八尾市）から―日光方面へ家族旅行です。―千年の謎秘めて咲く水芭蕉―美幸。

▼河野君子さん（大阪市）から―姉妹四人で西九州へ来ています。―地球のてっぺんで西海の島を抱く―君子。

▼**南大阪川柳会**―10月20日午後6時から、会場は大万―題―心境・仕込み・枠・レベル。

新同人紹介

河村石捨

山本祇風

里小路

南柳・摩天郎・小松園―推薦

誠意と技術で
世界のために
シャープ株式会社

御　礼

東洋樹川柳賞受賞記念・第27回西日本川柳大会には各地から多数のご参加をいただきましてありがとうございました。厚く御礼申しあげます。

皆様のご清栄を祈り上げます。

弓削川柳社

本社九月句会

会場　文化会館
八日　午後六時

足場のやや悪いこんどの会場―それでも66名のご出席だった。香川県から三井酔夢さんのご出席は感激デス。それから古川鶴声氏が杖をついてのご出席、これも感激デス。（とは与呂志・敏・重人の受け付け交通局トリオの弁）

柳話は野村太茂津氏の初登場。敗戦三十年の今日を思えば、まるで悪夢のようだが、生き地獄の中で生き抜いてきた真実はわれわれの胸中から去らない。あの温顔太茂津氏が備前長船の試めし斬りなど、やっぱりあの頃はみな狂っていたのであろう。―きょう一日を有意義に、というのが話の中心だった。

月間賞杯は元不朽洞会員の欄蘭氏がベテランの味を示めされた。　―8時30分閉会

―進行・西田柳宏子―記録・高杉鬼遊

出席―古方・正彰・与呂志・緑水・太茂津・千寿子・漫柳・文秋・右近・蘭・一三夫・鶴声・美幸・万的・一舟・好一・維久子・柳宏子・夕花・勝晴・千万子・南柳・柳信・六竜子・薫風・十止庵・重人・滋雀・花梢・美代・敏・静歩・寿美子・古啓・喜風・葛城・静馬・庸佑・一二三・岳人・肖二・綾女・瓢太・吸江・千梢・生々庵・度・栞・あいき・鬼遊・雀踊子・牧人・操子・弥生・いわを・智子・君子・幸代・武助・儀一・鎮彦・亜成・頂留子・好郎・酔夢・多久志（公用欠席）葉子。

席題「食べる」　　阪上十止庵選

一日を五回も食べて寝たっきり　千梢
食べ残された翅だけくもの巣に残り　万的
たべあきたロが板場をこまらせる　千万子
少し傷んだほうのバナナを妻が食べる　夕花
早よ食べる癖がかなしい日曜日　千寿子
里帰り食べねば損のように食べ　維久子
山男山の景色を食べている　岳人
会費だけしっかり食べている下座　庸佑
グリーン車から降りてホームのそばの味　生々庵
招かざる客のよく飲みよく食べる　柳宏子
食い倒れやろどこもかしこも混んでいる　古方
食べ盛りが居て質よりも量を取り　瓢太
じゃまくさそうに男何やら食べている　古方
不味いものないと達者な父の箸　維久子
老人の何はともあれ食べるだけ　儀一
ふる里に母あり母の味を食べ　夕花
食べるのが精一杯の靴が減る　牧人
ともかくも食べる仕事へ掌をあわせ　静歩
よく食べて欲しいが米の値が上り　鬼遊
お蚕さんの食欲子供の手も借りる　万的
退屈な女が食べてばかりいる　君子
山彦があるからうまい握りめし　雀踊子
食べるもの食べず軍歌を知っている　岳人
食べるだけで人間性が消えている　十止庵

席題「先生」　　西いわを選

先生の帰るコースに縄のれん　鬼遊
記念樹の下で涙の師と出会い　与呂志
先生を追い抜いて居たハゲ具合　南柳
定年の恩師をたずねてきた外車　花梢
先生と呼ばれ妻には阿呆にされ　太茂津
カンカンになるから先生つとまらず　古方
先生の生花へ門人の口が過ぎ　六竜子
老いた師にまだ教え子の手の温み　一二三
先生の字に似て来たとうらまれる　寿美子
目に見えぬ鞭を先生持っている　緑水
今日の先生夫婦喧嘩をしたらしい　智子
卒業証書もらえば先生に用がない　静馬
先生に先生がいる石の段　古啓
くたくたになって先生の旅終る　生々庵
トイレから手も洗らわずに来た先生　与呂志
先生が赤旗振っている自習　重人
先生をアナタと呼べる日の近し　夕花
口もとのホクロを先生におぼえられ　夕花
先生が卒業式に小さく居る　肖二
制服の胸に先生棲みはじめ　夕花

遺句集となった

永宗宗義句集

「高瀬舟」

送料共　三百円

いちばん叱った子が先生を忘れない　智子
先生といわれる人の労働歌　十止庵
先生と尊敬できる人をもつ　亜成
結婚の噂の先生で薄化粧　弥生
嘘つかぬ先生話しを聞いてくれ　鎮彦
先生と遅刻のバスに乗り合わせ　滋雀
先生の威厳も小学一年生　武助
回診の若先生に寄る人気　庸佑
先生と呼ばれ内心うれしがり　好郎
先生はワイシャツの白よく似合い　吸江
先生の通りに運ぶＰＴＡ　いわを

兼題「ひらめく」　金井　文秋選

善後策ひらめきお茶が酒になり　登美也
ひらめかぬ勘へ司会者助け舟　誓二
ひらめきがあると親馬鹿ピアノ買う　どんたく
午前二時ひらめくままに走るペン　曲ん手
すぐピンとくるらし三十年も添うとれば　日満
ひらめきを句にするだけが生きる糧　一栄
失明の今もひらめく日章旗　正朗
ひらめいた案は上座で潰される　芳子
考えても考えてもひらめかないので寝る　亜鈍
知恵おくれの童画にひらめく画才見る　牧人
ひらめきへ男は今日を賭けてみる　好一
ひらめきが無うても椅子が帰らせず　一舟
ひらめいて一気に山場書きあげる　庸佑

▼菊沢小松園氏から―竹原の大会は病中の静水氏も出席。こちらから栞・牧人・雀踊子・酔々・鬼遊・凡九郎・〆女・小松園同勢八名参加。一六五名の盛会でした。

打ち込んだ芸にひらめくものがあり　肖二
ひらめきが女の妬心かきたてる　好一
たわいないひらめき特許とっている　酔夢
ひらめくと男まっすぐ走り出す　岳人
斗病の中はひらめくこと多し　吸江
ひらめきへ残念でした時間切れ　儀一
ひらめきの鈍さ根気で勝負する　静馬
無造作に女ダイヤをひらめかし　喜風
ひらめきがなくて理詰めでくる男　君子
ふくぶくと肥えてひらめくものもなし　智子
夜間電話悪い予感が先走り　蘭
ひらめきを信じた馬券から外れ　滋雀
ひらめかぬ時はマンガを読んで寝る　古啓
恐さ知らずにひらめくまま動く　幸代
凡人のひらめき欲がつきまとい　鬼遊
ひらめきも二番煎じの味気なさ　南柳
老いしかな心にひらめくものがない　牧人
ギャンブルを止めたらひらめきよく当り　あいき
目から目へ愛のひらめきすぐに炎え　千万子
札束はときに悪意をひらめかす　智子
ひらめいた嘘で女は身を守る　夕花
ひらめきを神の御声と受けとめる　好一
孫のひらめき未来図に虹をかけ　綾女
ひらめいた勘が哀しい妻にする　夕花
ひらめかぬ女に無事な日が暮れる　寿美子

兼題「象」　傍島　静馬選

象牙より柘植になさいと印相学　誓二
象に乗る特権もってるサーカス嬢　登美也
観音を刻む象牙のうるわしさ　川狂子
アフリカの象は仏心なぞ知らず　曲ん手
白象に生れエリートとして生きる　弘生
郷愁しきりのような象の眼に出合い　一栄
象さんも生きねばならぬ碁盤乗り　芳子
象君よ君にも汗が出るかいな　亜鈍
不況など知らぬと象はたんと食べ　季賛
象牙の塔巣喰ってました赤い蟻　みどり
喝采に象もこたえる鼻をあげ　日満
象の鼻なぜ長いかと孫が聞き　藤持
茫洋と迫まらぬ象を範とする　どんたく
クラス会象ほど食べるオチョボロ　漫柳
シコを踏む象求愛してるらし　鎮彦
象の見る人はせっかち過ぎて見え　喜風
ブルドーザのように逞まし象の群れ　蘭
牙が見事で象はいのちを狙われる　牧人
思春期の象は手毬がほしくなる　夕花
象のような瞳をして案外抜け目なし　美幸
象の眼に似てる社長で親しまれ　葛城
象の恋鼻からませて愛語る　一三夫
水遊び子象へシャワーかける鼻　柳宏子
暑いあつい象は自前のシャワーする　滋雀
普賢菩薩象の御顔は見てくれず　万的
鼻をふるジンタへ象の目が哀し　美代
名は花子動物園に籍を置き　鬼遊
印度の親思い出してる小象の瞳　綾女
背景に象を写した子沢山　蘭
クレヨン画鼻から象はのびてゆき　滋雀
喝采をしても象の目たじろがず　吸江
争いはきらい象さんデカくても　千寿子
ひざ曲げた象おじぎと手を叩き　一舟
泊る気になった象牙のペンダント　維久子
思いきりジャングルを駈けた象の夢　六竜子

飼育係へ象さん鼻でたわむれる　操子
遊園地で見たすべり台象の鼻　亜成
象の鼻一匹の蟻もて余し　牧人
砂利トラのようにはかりにのった象　度
総身に知恵がまわらぬままの象の恋　生々庵
長い鼻描けばなんとか象に似る　緑水
わたしの手よりずっと器用な象の鼻　智子
ハリボテの象で嬉しい花祭　古方
象の欠伸いっぺん見たいなと思う　静馬

兼題「童話」　戸田　古方選

童話集大人の世界よごれすぎ　登美也
童話めく話素直に聞いてやる　季賛
シンデレラになった孫の目生きていた　祥月
老夫婦童話のような日を送り　正朗
怪獣に童話の世界忘れられ　一栄
民宿の民話みっちりくっちりと　みどり
お祖母ちゃんの桃太郎やから聞いたげる　優
2DKに童話など生れない　亜鈍
山脈のむこうにきっとある童話　酔夢
性教育童話の中で説いておく　一三夫
自己嫌悪ある日童話の狐めき　古啓
童話でもやっぱりきれいな娘が好かれ　吸江
童話の上手な先生が好き幼稚園　操子
メルヘンの世界もやっぱりひもじくて　寿美子
童話の嘘は子供が作り上げ　与呂志
まんまるうお月さんが出て童話　栞
今も桃流れる川を信じたし　鬼遊
童話劇皆倖になって幕　花梢
それでいいやないかと童話を飛躍させ　維久子
あの丘も雲も童話の挿絵だな　寿美子
亀はもう童話の海へ帰らない　美幸
童話書く老女の背中は丸くない　幸代
間の抜けた童話の鬼は憎めない　牧人
神風の童話は月に逃げました　日満
新婚は童話の積木つみ上げる　鎮彦
大人がからんで童話もつれ出し　鎮彦
童話見て子の真実を見つけ　鎮彦
性科学女大学童話めく　弘生
くもが巣をつくる童話のままの空　万的
枯葉ひらり冬の童話は始まりぬ　古啓
狼に食べられましたという童話　寿美子
砂山にきのうの童話が埋めてある　智子
悪狸自分が落ちた落し穴　いわを
丸木橋渡る夫婦は童話めき　千梢
童話そのまま枯葉一枚落ちもせず　万的
デラックスな童話絵の具のとんだ痕　古方

兼題「地図」　川村　好郎選

迷わずに彼岸へ行ける地図を撰り　滋雀
恋の地図道は一直線でなし　寿美子
かけ出しのセールスマンに地図かない　肖二
合掌の夫婦に明日の地図がある　美幸
地図捨てた放浪詩人風に乗る　酔夢
村一つ消えた故郷の地図変る　弥生
捨てた故里心の地図はまだ消えず　あいき
人生地図無駄でなかった回り道　静馬
土となるひとの流転に地図がない　弥生
これからのわたしの地図を書きかえる　夕花
この辺を買えば儲かる地図を出し　多久志
愛の地図ここは二人の番外地　一三夫
ディトの思い出市電のあった頃の地図　生々庵
地図の海汚染の色に塗ってなし　寿美子
地図見れば一億住むとも思われず　瓢太
地図よりも勘が頼りの山男　肖二
交番の巡査地図までかいてくれ　多久志
世界地図少年の夢翔けている　緑水
独身の最後を飾る地図を行く　弥生
国境の地図ここからは色がなし　栞
地図に無い穴場が旅を楽しませ　一二三
大阪のここらで聞けという略図　日満
欲ばった名所地図へたそがれる　雀踏子
ふる里に心の地図を買いにゆく　君子
黄昏に地図を展げてまだ迷い　太茂津
寺町で寺がわからぬ地図となる　栞
子の地図は父の歩けぬ道ばかり　十止庵
此の地図は私とあなたの歩く地図　重人
地図ひろげ自分の位置がわからない　吸江
北領が戻らぬ地図にある墓標　雀踊子
ママの地図矢印が多すぎる　花梢
青年の地図に止まれの標示なし　静馬
帰る途女の地図にかいてない　維久子
私だけにわかる夫の地図である　花梢
平和なら狭くてもよし日本地図　蘭
迷路つづく私の地図を手離さず　好郎

（河井庸佑・整理）

北川春巣著　句と随筆「聴診器」

送料共　千円

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

どんぐり川柳会　谷垣　史好報

皇帝のシャツにじんだ汗がない　美幸
石の中味は慈悲だと思う野のほとけ　酔々
アンケートうちの中身をのぞきに来　好郎
駅近く来てから中身分りかけ　弥生
愛憎の空しさ土にかえるとき　サヨ
背伸びしたくらし私が憎くなる　小松園
憎めない男やっぱり頼りなし　いわを
菓子箱の中身が黒い霧になり　鬼遊
憎まれぬ人でうだつが上らない　百酒
連れ添うて中味ぽつぽつ出る温み　喜風
どこで何して来たかシャツのしわ　儀一
憎い程うまい口説きにひっかかり　克美
まっすぐに歩く中身は炎えている　鎮彦
汗臭いシャツで一家が支えられ　吸江
周遊券中身は蜜のような日々　恵美子
中身だけと瓶の預り券をくれ　重夫
玉手箱の中身を今も信じてる　史好

川柳わかやま　野村太茂津報

喜びも探せばあった今日も無事　好郎
悔いのない汗天国となる日蔭　武雄
腹の虫殺して殺して平社員　千寿子
からくりの淵へ正論殺される　きみ
風鈴の音色涼しき椽に寝る　佐知子
悩殺を心待ちして無視される　英子
真直ぐに歩いて安堵の城に居る　としよ
二人連れそこだけ時が静止する　和子
青い鳥探しつづける日のあせり　マサ子
探しても私には無い指定席　幸
長所だけ探す親ばか目を細め　寿子
探しても夫の心は見つからず　冨江
歩かねばならず坂道遠くとも　与史
蛙の子親父と同じ道歩く　万作
殺し合う若い輩に明日がない　福水
真直ぐに歩く男で阿呆になる　雀踊子
果しない夢笑われそうな探しもの　凡九郎
本能のまま歩いてる釜ケ崎　道夫
虫一つ殺さぬ顔に欺される　柳宏子
止らずに歩こう倖せこぼれそう　太茂津

城北明朗句会　川口　弘生報

姑にソーメンゆがくコツを訊き　春巣
のれんのような人に相談してしまい　智子
そつけない返事になった金のこと　正朗
騒音の町逃げ出せず胃が痛み　牧人
先ず一献相当いけるロと見る　右近
雑巾雑巾と奥では茶をこぼし　誓二
そろばんに血を通わせて老店主　美幸
損得で出来ますかいと役を持ち　小路
外れ弾に当ろうなどと思ってず　弘生
相談に乗って渦中に巻きこまれ　百酒
雑草のようにきっかけのがさない　ますゑ
揃わない二人三脚笑う他人　満津子
粗衣して一姫二太郎よく育ち　静歩
騒音訴訟赤ん坊まで連れてくる　三十四
それとなくデートの首尾を訊くも母　太茂津
神経痛いたくない間と旅行する　つね
モラロジーきいて人のアラばかり見え　繁子
お手前はすり足運ぶぎこちなさ　炉斉
ぽっくりと楽な往生ねがう老人　秀村

川柳東大阪　竹中　肖二報

菖蒲咲く男の季節だと思う　十止庵
ちらかった菖蒲へ愚痴のしまい風呂　儀一
生きました十円借りた販売機　喜風
人生の生き抜き旅ではけちらない　正彰
喜こんで出させて貰う金が生き　好一
チップ効いたか痒いとこへ手が届き　誓二
喜びを買う金ならば惜しまない　柳宏子
倒産を食い止めてやる金を貸し　文秋
利用価値あるから菓子箱さげてゆく　美子
悟ってもやっぱり愚痴がプイと出る　鎮彦
人間の哀しさ何回でも悟り　弘生
他人事だから悟ったような事を云う　三十四
禅僧の悟りは腹がへっている　度
週末の切符に指定席がない　思月
自動改札正直者が馬鹿みそう　恒明
片道でよし極楽の切符なら　小松園
アンテナへ波長の合わぬ老夫婦　肖二
ATCアンテナいかついくの字型　古方
スト解除聞いて飛び出す律義者　綾女
スト出来るさかいしてはるストライキ　凡九郎

川柳たましま　稲田　豊作報

先妻の指紋がついているノート　克枝
恋人の異う素顔を見てもらい　扇水

根性が武器だ両手に何もない　八笑人
どたん場という根性の匂うとこ　千翁
ゆずり合う虚礼がふさぐ出入口　朝二
素足になった時女は根性を出す　林鶴
ボロボロの靴坂道をゆずらない　澄子
ゆずられた一歩に敗北感が泌み　梁水
正直の子に拳骨を引っ込める　誠一
闇の夜のけわしさ抜けた老の道　流風
仕舞風呂愚痴浮かべたり沈めたり　鼓草
白髪の夫婦の庭に赤いバラ　静海
アルバイトした子のノート字が乱れ　安静
いつか許す日がある父のカレンダー　三辛堂
言いにくい意見斜めに坐りかえ　里風
平凡な幸せエプロンよく似合う　秀子
コンピューターの頭脳に人間かたまげ　豊作

むらくも川柳会　小砂　白汀報

テレビ見て続くドラマの先不要　マサコ
惜しまれて佐藤さん天国へ　敏明
又来てね名残り惜んだ手のぬく味　ヨシ子
諦めてそれから惜しいという男　湖楽
価が高く買手が付けばなお惜しい　信朗
これも惜しいと大掃除はかどらず　明朗
散る花を惜しみカメラに入れて去に　とみ子
惜しまれて去る人歩巾のしっかりと　信夫
真二つ割れた家宝の古い壺　祥月
ゆっくりとする気の雲の速い足　一郎
夕涼み王手飛車だとゆり起こし　勇
ストに逢い思わぬとこから歩かされ　英子
片言の孫が疲れを持っていき　蓮露
聞き耳へ惜しいところが聞きとれず　文子
生かすため惜しい枝だが切り落とす　福子
涼み台大きく飛んだ星仰ぐ　澄水
底抜けに可愛いいものを孫と知る　秀子
ゆっくりと煮つめる母の味が好き　孝華
黙々と続けることのむつかしさ　白汀

岸和田川柳会　植山　武助報

芸術と云う名で撮影する裸　武助
その筋は美術の裸婦をエロに見る　加仙
蟬しぐれ短い余命を謳歌する　千代
風鈴の鳴っている間に子等寝つく　有雅
何一つ過去を語らぬ謎の人　露子
酒に愚痴言って溜息眠てしまゝ　春栄
身勝手が過ぎて孤独に泣く老後　香珠夫
前進へ失意の日日のありてこそ　操子

川柳たけはら　森井　菁居報

夫婦きり何を食べよと食べまいと　静水
お昼寝の夫の寝顔に祈ること　房子
ウイスキー今日は一人の部屋にする　美佐雄
今日わ今日わ僕は悲しきセールスマン　蘭幸
一才の寝顔はしかと二人の子　笑子
薬師寺のうらも歩いて旅終る　政己
雨の日の和服へ久し振りの下駄　凡女
よく眠る男退院を口にせず　不朽
背を向けてみても政治がつきまとい　菁居
主婦寝てもおれぬ週休二日制　そのみ
あやとりのはしご小人はのぼれそう　愛
セールスが美人で聞くだけ聞いてやる　一路
八十八夜なごりの冷に茶摘み唄　紫光
すっぱいぞ良妻賢母という木の実　のばら
健康がうれしい趣味の裁ち鋏　貞子
ボウリングゴルフも知らず夫老い　かつ子
公園のブランコ私がいて彼がいて　千代美

凡々のつれづれ

「風　選」　非売品

句あり、文あり、三二八ページの豪華版である。東野大八氏ほか健筆陣が錦上花を添える。発行所―奈良県生駒郡平群町椹原五〇四―川柳むつみ社・深井章。

ご支援のほどを

京都塔の会

京都市南区西九条開ケ町四一―一
（電075・681・5067）

寝ころべば古里の空まだ青い　英詩
離婚する勇気あっぱれとも思い　酉合
決心をうながすように自動ドア　文明
パレットへ熔こうよ里の空のいろ　鬼焼

南大阪川柳会　金井　文秋報

この人に無茶をいわせるイスがある　十止庵
生え抜きは社長の無茶も聞いてやり　一舟
夫婦です無茶な言葉もうれしい日　岳人
少年の反抗無茶と知っている　雀踊子
守りぬく女の城は悔ばかり　柳信
家守る妻のケチケチお献立　綾女
岩田帯もう母として守るもの　君子
社の内規きっちり守り平で居る　肖二
アイロンの温みのままを穿かされ　智子
アイロンを避けてゆっくり猫坐る　酔々
妻とは何かアイロンかけながら　好郎

仕事とは別ギャンブルに強い奴　柳宏子
能力と別にスターは作られる　文秋
一枚の紙に能力見透かされ　儀一
能力の無さを惨めな酒で悔い　一二三
正体を掴んで見たい酒を酌ぎ　柳志
正体は聞かず語らずドヤ住まい　好一
正体も知らぬ運命の糸に舞い　正彰
人間の正体どん底になって知る　千万子
損得がからんで正体あらわした　思月

南海電鉄川柳会（大阪市）　辻　圭水報

洗脳をされて誘致に借り出され　柳信
多数決やっぱり裏のある誘致　十止庵
公害の発生源と知らず呼び　綾女
誘致反対早速今夜寄るという　小松園
ポスターの誘致の蛸はね上り　摩天郎
高度成長誘致の罪を背負わされ　宏子
工場誘致目高棲まない河にする　維久子
政策が変り誘致が仇になり　儀一
誘致した時は緑もあったのに　圭水
バス誘致までと相乗る団地タク　正彰
誘致してたんまり税金吸い上げる　肖二
誘致した旅で楽しい湯にひたり　季賛
S・Lが北海道へ誘致され　鎮彦
うわの空月に挑戦するでなし　川狂子

和歌山七面句会　中筋　三幸嶺

湯上りの青いお尻りで逃げまわり　和美
忘れたい青春の或る一ページ　佐知子
左派と右派上手に泳ぐ過去を秘し　太茂津
団扇の絵みな面長の写楽風　其夕
泳ぐ天衣無縫のようにして　光治
泳げずに水平線を見て帰り　澄子
すいすいと目高の学校移動する　凡夫
燃えるもの捨てて静かに海の青　みゆき
嘘の目をかくす団扇をもてあそぶ　冨子
木蓮の芯なお青く空に向き　勇次
青色の申告うそも書き入れて　知也
屈辱に耐ゆる扇子をにぎりしめ　淳子
泳ぎ下手だから夫を信じられ　政夫
夕涼み団扇の風に目をほそめ　利明
ふる里を青一色に描く祈り　武雄
人波を泳ぎバーゲン確める　三幸

川柳ささやま　河原　みのる報

喰うものも喰わず育てて出て行かれ　可住
節約論出して晩酌減らされる　秀峰
節約を気付いたとたん馘られ　みのる
さもあらんお金持ちほど節約し　近江
もう一度咲きたい小いさな花でよい　つや子
一つだけ足らん男がもてている　村雨
一年に一度の愛に雨かなし　喜美代
着任の校長先ず伝統をほめてから　越山
勤勉の家憲ゆさぶるコンバイン　宗珠
伝統を継ぐ娘へ鞭は強く打ち　多久志
ひき蛙ご用の向きはとかしこまり　よしの
この池も食用蛙君臨し　ひか平
武器持たぬ蛙に生きる道のあり　淡水
春耕へ蛙にすまぬ鋤の先　百合子
オープンな水着ポイントだけ残し　とんぼ

虹川柳倶楽部（唐津市）新岡回天子報

手花火を囲む繊き手の屏風　照沖
一雨がほしいと妻と夕涼み　実
経験を古老から聞く夕涼み　一竿
干台が座敷に変る花火の夜　筒井
子が背へ書く平仮名や夕涼み　畑中
招かざる客も飛込む夕涼み　五木
一斉に仰ぐ花火に星が消え　勝一
夕涼み何か買って呉れそう土曜市　三男
利息などいりませんよと高くつき　虹汀
舞鶴橋型の通りに花火舞い　久隆
新婚は夜毎木闇の夕涼み　呼久
待つ花火疲れた頃にドント鳴り　重光
男なら女をせめたりなどしない　愛郷
こんな事故二度起しませんと警察署　広坊
波の中噴き出るような花火なり　回天子

オーエスケー川柳会　大坂　形水報

スランプの巨人長島天仰ぐ　みどり
下車際にヒャッと首へひと雫　前田
白髪の強い言葉に動かされ　秀川

佳句地10選（前月から）

児島与呂志選

雲水の心が竹にそそぐ雨　水客
よろこびを女の下駄で走って来　南風郎
後から呼び止められて負けている　冨子
嘘まこと子に念押され親吐息　虹汀
銃口の的に祖国が二つある　雀踊子
山門を出れば悟りが消えている　柳宏子
少し派手撰んでくれた嫁をほめ　秀子
題名が付くと構図もそう見える　文秋
逢えば愚痴逢わねばさみし女親　英詩
中性に育てた覚えない夫婦　小松園

紅白を配って今日はパパであり　千夢
立呑で雫残さずうまく飲み　岳麓
小ぬか雨音もたてないまま雫　聖地
流行よりミニの女性に目が走る　一念
短くて短くて含蓄のある便り　亜成
純白のドレスで嫁ぐ愛娘　亜也子
雫振り払って犬が帰って来　一扇
ほっそりと月の雫のように立ち　栄
スランプと待ってはくれぬ支払日　常夢
泣きごとは言うまいスランプ旅に出る　弥生
スランプの机タバコを喫うばかり　形水
スランプは失恋からと人知らず　好郎
スランプへ男だまって挑む日々　木石
球をつくイルカの髪をはう雫　入仙

京都塔の会　松川　杜的報

煮え切った舗道を僕の影が這う　求芽
海峡は夏雲は左右へ逃げていく　和友
ふるさとの詩公害はここにまで　王石
盆栽にテラス半分陣取られ　潮花
紫陽花の毬がくずれて庭が荒れ　笛珠
雨の情緒はなかったが坂は石畳　蘇堂
怪我をした思い出がある苔の坂　永楽
巡礼に坂道がありありがたし　季賛
坂へ来て外車に音もなく抜かれ　誠史
坂の名がバス停になりいい眺め　白渓子
月・山・水・京の河原の床はよし　飛鳥
鉾・空を指してビルの高さに負けていず　水客
六十の坂ジクザグがまだつづく　杜的

後楽吟社（岡山）　井上柳五郎報

土用鰻焼く魚屋も口をあけ　恒洋
花の駅土用も草を削ってる　照路
土用波三面記事を暗くする　胡風
土用の陽受けてひしおの味がつき　秋月
誘うては見たがやっぱりへそ曲り　博友
年寄りの誘い年寄りすぐに折れ　久米雄
宝石に意志のない目が誘われて　廉
見せまいと着たよろいから出る弱味　たけ志
ただ酒を飲んだ弱味へつけ込まれ　哲郎
倒れたら控えに人のない弱味　勝
出戻りの弱味苦渋に堪えに堪え　柳五郎
弱味知る子を控え目叱る妻　武士
台風をぐっと支えて山けわし　熙
台風銀座それでも故郷捨てきれず　佐加恵
台風の浮気にそっと胸をなで　栄遊

駒つなぎ句会（大阪市）岸　南柳報

イエスマンとてもらくでいいですね　弘子
行水の素肌へ声をひっこめる　南柳
設計のミスか手抜きかかしましい　善信
親方に手抜きのことも教えられ　育園
先生の手抜き宿題たんと出し　恭太
手抜きした証拠に雨が漏り初め　綾女
バーゲン用手抜きの品で客集め　茂子
値切ったら値切ったで手抜く術も知り　摩天郎
のほほんの人駈けさせたいなびかり　正彰
稲光り若い二人へ気をきかし　儀一
稲光り肩抱きよせた騎士感　規一朗
稲光り眺めてねばる大ジョッキ　小路
恋進むベンチを照らす稲光り　肖二
稲光り一しゅん暑さふきとばし　宏子
いなびかり急にゴルファーおじけ付き　石捨
結婚のきっかけつくるいなびかり　信義
いなびかり一人住いをおどしに来　柳信

岸和田市文化祭参加

第二十五回市民川柳大会

日　時　昭和五十年十月十日（体育の日）十二時―十七時

会　場　岸和田市民会館ホール

司　会　岸和田川柳会　池田香珠夫

挨　拶　岸和田川柳会　高橋　操子

来賓挨拶　岸和田市教育委員会
岸和田市文化協会

柳　話　（川柳塔社主幹）　中島生々庵

兼　題　「浪人」　植山武助選
「女」　菊沢小松園選
「さわやか」　青木三碧選
「親」　八木摩天郎選
「坂」　榎本聡夢選
「半日」　高橋操子選

席　題　当日二題発表（兼席各題二句宛）

星　賞　市長賞・議長賞・教育委員会賞
文化協会賞・きしせん賞・各題
秀句賞

締　切　14時　出句は出席者に限ります

入選句集代　三〇〇円

主　催　**岸和田川柳会**

〒岸貝局〇七二四（22）六六三一

後　援　岸和田市教育委員会
後　援　岸和田市文化協会

稲光り女はそれを利用する　鎮彦
いなびかり女素直についてくる　小松園

ハワイ川柳ウイロー社　林　蒼蛇楼報

安心をしてつき合える友があり　カロ女

夫婦愛あって安心共かせぎ　一つ葉
頼る人あって寝息も安らかに　風影
まとまった話手を締め酒にする　三石
末の娘も嫁に行かせてほっとする　小雪
安心し任せるまでに信じ合い　椰子郎
初旅に出して安心出来ぬ母　拝山
身から出たさびとは言えどこの不安　草海
やっと峠は越したと医者は汗をふき　蒼蛇楼
我が子との安心出来ぬ世とはなり　彩珉
つまずいた不出来を人になすりつけ　暁舟
つまずきの教訓生かし今日の地位　秀山
つまずいた後で悟った人の道　万里歩
七ころび八起きと人生はげまされ　稠雄
つまずいた石を路傍へ寄せて行く　河舟
つまずいて始めてわかる気のつかれ　雪女
つまずきのある人生でまた楽し　峯円
つまずきを重ね動かぬ腹が出来　北海
けつまずきあたり気にして背を伸し　紅渓
つまずいた石も拾って起きる人　公女

三井が丘川柳会　高田　博泉報

かき氷とけてしまった長話　亜也子
氷枕カラカラと母の音がする　てまり
遠泳にいつのまにやらぼくひとり　亜鈍
のぼりつめれば停年待っていた階段　亜成
泳ぎつく課長の椅子が停年に　博泉
氷屋の鋸、三挺掛けてある　水声
氷嚢へ入れる氷に祈りこめ　公子
階段をあるいて五階留守を知る　三郎
熱帯魚四角い海を泳がされ　鬼遊
デパートの階段探し行くトイレ　一菁
階段を登れば嫁は他人めく　世山
いい事があって階段馳け上る　〆女
死ぬまでは登り続ける階段か　柳宏子
五階までとどけてビール汗を拭き　小路
礼拝堂のステンドグラスへ幻想の階段　浄平
方便の嘘も言えない泳ぎ下手　形水
世を泳ぐ知恵学歴にふれずいる　凡九郎
カチ割りの近づいてくる外野席　古方
ラセン階段心の闇へ星が落ち　水客
階段の途中で息を入れ替える　牧人
氷が溶けるように死ねれば安からん　薫風

川柳大阪　児島与呂志報

もめている電話の軍師駈けつける　秀峰
止り木に男のような足もあり　徹舟
梅雨明けの雷力こめて鳴り　徳松
三度目は仏の顔がだめを押し　楽々
先輩の近況さすがの句に生きる　雅巣
雑魚の方が僕の気性を知っている　季賛
海洋博もうそこにある梅雨が明け　胡蝶
だめ押した約束電話で逃げられる　喜酔
岸壁へハンドル向ける保険金　本蔭棒
こんな良い記事ローカル版から拾い　道子
てんこもりのウソを夜の女たち　六竜子
ローカルが聞き耳たてた標準語　重人
てんこもり太田胃散を友とする　漁人
小さいが保険残してくれた母　笑風
ホームラン顔顔顔がてんこもり　眉水
背信の朝の目ざめに残る悔い　洛酔
変心を女の直感見のがさず　敏
花嫁修業茶花料理和洋裁　鶴丸
駅までの歩巾をせかす陽を背負う　与呂志

国鉄川柳句集

（昭和50年版）

全国鉄川柳人連盟は川柳句集第十九集を刊行。—大鉄局の川雑同人の手で川柳が移植され云々と国弘半休門氏が執筆。本社同人の国鉄マンも参加。定価七百円。

発行所　国鉄広島鉄道管理局東広島駅—小林てるじ（全国鉄川柳人連盟）

第27回 大阪文化祭川柳大会

日時　11月9日（日）10時開場—1時締切・開会

会場　中央公会堂（3階小集会室）

講演　「大阪らしい川柳」　川柳文学社主幹　堀口　塊人氏

兼題　「野性」　加賀　破竹選
「ファン」　久保田以兆選
「壁」　橘高　薫風選
「近頃の社会記事から」　広瀬　反省選

題　「ねばる」　岸田万彩郎選
「橋」　伊東　静夢選

席題　（当日4題発表）

出句　各題2句以内（締切1時）出句は出席者に限ります。

賞　席・兼題とも秀句に、府知事、大阪市長、府市教育委員長から川柳賞。

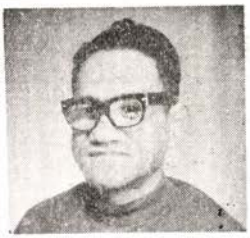
句集　入選句集は三〇〇円。当日申込受付主催、大阪府・大阪市・大阪府教育委員会・大阪市教育委員会

誰からも愛された垂井葵水さんの遺句集が出ます。

序文・中島生々庵・西尾栞・野村太茂津諸氏

垂井葵水遺句集

十一月一日発行
（送料共千円）



川村好郎・西尾栞・野村太茂津諸氏が選句にあたり、葵水さん生前の姿を彷彿とさせてくれます。読んだあと、書架に飾れば他書を圧倒する豪華な外箱が自慢です。（自分の句集のためのとっておきのアイデアを葵水さんにわたしてしまいました—一三夫）

11月7日の本社句会は句集刊行記念句会になります。題—粋人・新聞・スポーツ・みかん。

募集

十二月号発表（10月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）菊沢小松園選
愛染帖（3句）橋高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「歳暮」高橋千万子選
「納め」高橋鬼焼選
「プリンス」吉岡逓児選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

新年号発表（11月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）菊沢小松園選
愛染帖（3句）橋高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「建つ」堀江芳子選
「発つ」木村涼人選
「起つ」河村日満選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳筐をご使用ください。

規定はお守りください

定価三百円（送料十六円）
半年分 千八百五十円（送料共）
一年分 三千六百円（送料共）
昭和五十年九月二十五日印刷
昭和五十年十月一日発行
編集兼発行人 大阪市南区鰻谷中之町二〇番地 中島蓬太郎
印刷所 藤原童心社
郵便番号 542
大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
発行所 川柳塔社
電話大阪・二七一—三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

お買物は
4都を結ぶ
大丸へ！

大阪・東京
大丸
京都・神戸

・ペンペン草・

十一冊目の10月号

★「川柳雑誌」改題以来11冊めの十月号。路郎賞は林瑞枝さん（山陰勢強し）川柳塔賞は安藤寿美子さん（豊中市）にきまった。

秋

★さわやかな秋。徹夜の朝はもう寒い。それも道理、あと二冊こらえると新年号だ。こんな仕事をしているとアッというまに一年は経ってしまう。

葉子コーナー

▼9月末から10月にかけて山葡萄狩りに子供の頃よく行きました。種なし葡萄の大きさで黒いほど甘く、熊の出そうなとこに沢山成って、蔦が木につたわり高い数珠なりになります。運動×の私でも木登りは好きで、黒服を着て熊に見せかけ驚かせたものです

★売れっ子の選者は各地の文化祭川柳大会にひっぱられ大変だとおもう。ぼくのように本社以外の句会には顔も出さない者にはその苦労がわからないが、ぼくもぼくなりに相変らず忙しい。スポーツニッポンから官能小説を貰い（9月23日から30回連載）三日間で九十枚書いた。柳務のかたわら一日三十枚は久しぶりに快よい疲れをおぼえたことである。

★生々庵・小石ご夫妻は来春発刊の句集のご選句に大わらわとうかがった。令息医博のご孝養が句集刊行となったのだが、生々庵主幹はタイトルを「めおと岩」ともらされたが、令息は「生々楽天」にしたいとほのめかされた。ぼくは両方ともいいとおもった。さて、どっちにきまるか。

積み残し

★たくさん原稿をいただきながら、思うように消化できなく申しわけない。二、三回増ページをすればよいのだが、なるべく金を使わないようにしているので、もう少しお待ちください。

積ん読く

★机の右端に買ってきた雑誌などを積んでおき、読んだものから他の場所へ移していくのだが、忙しい日がつづくとすぐ塔のように高くなる。本誌の積み残しの原稿に似てイライラする日が多い。

天高し

★秋は作句のシーズンだ、と無責任なことを書いてきたが、毎月の締切日と取り組んでいて、そんな悠長なことを云ってはおれないではないか。一年中が作句シーズンでなければならないはずである。

（不二田一三夫）

姉妹品大和錦印

九櫻

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

柔道衣
剣道具

早川繊維工業株式会社
大阪支店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電話（779）1690～2番

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十九年二月二十五日 印刷
昭和五十九年二月一日 発行（毎月一日発行）
川柳塔三三三号 通巻三五八一号

川柳塔 十月号

定価 三百円（送料十六円）

製造・販売サントリー株式会社

（サントリー謹製）

上等の夜を約束する
上等のワイン。

金曜日はワインを買う日。

Suntory サントリーシャトーリオン〈赤・白〉1,500円●中瓶800円

美の殿堂
大和文華館

平城京をめぐる山々を一望の
静かな環境にある大和文華館
は　日本建築の特色に近代美
を生かした美術の殿堂です
収蔵品も日本・中国を中心に
国宝・重要文化財を含む　有
数のコレクションです
観覧時間…10時～17時
▶近鉄奈良線　学園前駅すぐ

近鉄